

第二部 研究者として過ごした日々

(一) 三十歳にして立つ？

人生には誰にも始まりがあり、最も華やかな時期が次に来て、最後に老いと病と死の時がやってくる。ここでは華やかだったかどうかを別にして、表面的には様々な経緯を辿った研究者としての体験とか経験について、三十代から五十代後半に限った話をしてみたい。

三十にして立つ、という言葉がある。古い中国の言葉だと思うが、私の場合も結果的にその言葉が該当するようだ。

長女の死を境に妻の百合子は社会と自分、また身近な家族と自分の間に厚い壁を設け、幼い次女の日常的な世話でさえ、ほぼ完全に放棄するような日々を送っていた。

ところが、私達夫婦が揃って三十歳を迎えた年、長男が生まれた。その出産を契機に、妻は急に変わった。よく笑う、よく話し掛ける。最初は長男だけ。それが私や次女に向ける態度にも広がっていった。

我家は突然、幸福な一家に変わった。もう朝に晩に、他所に預けていた娘を送迎する必要もなくなった。私にとって、これは眼に見えない太い鎖からの解放を意味していた。

学部 of 学生時代、最初に学んでいた実験心理学。すぐ人間性の研究に入りたいと思っていた私には、苦しかった時期だった。ただ、人間性の研究にも応用出来る科学の基本もしくは根本原理をそこで身に着けたことはとても大きな成果だった。

つづいて手を染めた臨床心理学では脳神経と人間の典型的な知能や言語認知能力の密接な関係を精神神経科で学び、心理テスターとして臨んだ刑務所や精神病院では人間の驚くべき多様さ、正常と異常、犯罪の内部に潜む複雑さ、について学んだ。これらは後日、貴重な体験や経験として、私の研究生活を支えてくれた。

私が丁度三十歳を迎えた年、三人の学者がノーベル医学生理学賞を与えられた。その三人とはK・ローレンツ、N・ティンバーゲン、K・フォン・フリッシュだったが、その三人は三人とも、医学や生理学の専門家でなかった。当時の私の目から見ると、彼等は典型的な生物学者、昆虫や鳥の専門家だった。では何故、彼等はノーベル医学生理学賞を勝ち得たのか。

二十世紀当初から彼等はみんな、昆虫や鳥の習性を地道に研究していた。習性を別な言葉で言えば、動物の本能。本能の表現型が遺伝的行動ということになる。

すべての動物は行動する。我々人間も例外でない。ただ、多くの動物が本

能的な行動を基本とするのに、我々人間の行動は本能を陰に隠す学習に依存している。

行動はそのまま現象として現れるから、目あるいは視覚に頼る部分が多い。だから、行動は我々すべての人間にとって、分かり易い。専門家の指摘する現象（本能的行動）を自分でも確認出来る。しかしそれが何故、そのように起こるのかという問題になると、一般の人間にはまったく分からない。

昆虫や様々な鳥の本能について彼等は長年、研究に没頭していた。本能の発生や発達メカニズム、あるいは本能の生態学的役割について、分かり易い解説を施した。

集団が協力して生きるミツバチ同士はどうやって会話しているのか。鳥は何故、一定の季節、一定の方向に飛び出して故郷に戻るのか。こうした疑問は専門家に限らず、普通の人が一生のどこかでふと考える疑問である。

彼等三人はそれらに一つ、一つ明快な答えを出していたのである。その上さらに、当時エトログーとかエソロジーと呼ばれた専門領域ではノーベル賞を受けた三人の弟子達が、研究対象を脳組織の単純な動物から我々人間に至る道を切り開こうとしていた。

研究と言われるかどうかは別にして、二十代の私は身近な飼犬（アイヌ犬）や野良犬を観察し、人並み以上の興味も抱いていた。それが偶然、この目新しい学問に結び付いた。

—そこに自分の活路がある。—

私は直観的にそう思った。三十歳、私はどうにか研究者として自分の道を歩き始めた。

(二) 飼育されるニホンザルの実験

実験心理学の一部に動物心理学という領域がある。北大の大学院に進む頃、その領域に関連した拙い成果を抱え、本意ではなかったが、私も毎年学会に出席した。その機会に、同年齢の中に親しく話の出来る若手の研究者仲間を見出した。中でも、大阪大学と京都大学に親しく話が出来た相手があった。

彼等の多くは当時、ニホンザルの研究に着手し、サル習性について面白い話を聞かせてくれた。そこで三十代の半ば、ある機会を利用して京都大学の霊長類研究所（愛知県犬山市）に出掛け、私も飼育中のサルを相手に研究を始めた。同時にそこで、かのエソロジーに関する論文や書籍に出会った。

実際、ニホンザルの研究は面白かった。同じ年齢で慶応大学出の浅野君の手を借り、幾つか実験も出来た。

浅野君は当初、慶応大学の文学部に所属しながら、何故か様々な研究機材の取扱いにも、最新のエレクトロニクス関連の知識と技術に特別な能力を備

えていた。

一方、私の方はサルを騙しながら、実験の世界に誘い込む能力に長けていた。何故かは分からない。天性のものか、それとも我儘な野良犬相手の日々が役立つのか。いずれにしても、私にとって、実験用のサルを騙すことも手懐けることも最初から難しくなかった。

浅野君と私は研究を進める上で相補的な関係にあった。そこで研究の構想から具体的な実験内容を事前に話し合い、二人で共同の研究をすることにした。

彼との研究についていえば、主なものが二つある。一つはニホンザルすべての群れや集団に起こる牡同士の社会順位に関するもの。もう一つがサルの群れが群れとして必要不可欠な仲間同士の確認能力や認識力の問題だった。

サルは体力があり、攻撃能力が高ければ社会的に有利な地位（ランク）を得られるのだろうか。あるいは他の理由があつて、あれほど厳しい上下関係ができてしまうのか。

ニホンサルの群れや社会生活において、順位は決定的な役割を果たす。食事の順番、牝の獲得。気分のいい休息所の確保。そのどれにおいても、順位は唯一の役割を果たしているように見える。だとしたら、特に牡同士は全力を挙げて高い地位を目指す筈だが、そこに科学的なメスを差し込む余地があるのか。

私が独自に考え、浅野君がそれを巧みな実験機材に置き換える。期間は三カ月余り。それでも望むべき結果は得られた。

まず、五頭の牡サルを相手に体力テストと気力テストを行う。一頭づつ実験室に導き、天井からバナナを吊るしながら相手の反応を見る。最初は手の届く一メートル。次いで、高さを順次上げ、どのサルがどの高さで失敗するか止めてしまうかを調べる。これが体力テストその一。

自然界でも広い飼育場でも、ニホンサルが一番力を出す場面は木に登って太い枝を揺らす行為。その場面を実験室に再現するのは浅野君の仕事。

最初は十五キロ、それを超える力を出せば大豆が一つ、サルの手元に落下する。最初の十五キロは一日で百回、次いで二十キロでまた百回。そこから引き上げるレベルを二・五キロに縮める。これが二つ目のテスト。

二つの実験を通じて明確な結果が得られた。五頭の間にも明確な落差が出てくれたのだ。

次の知能テストは仕掛けとその意味の説明が難しいので割愛する。ただそれでも、五頭の知能に明確な違いがあるという結果は明確に出た。

さてそれから五頭を一つの実験室に移す集団テスト。彼等の間では果たしてどんな結果が、あるいは現象が起こるのか。それはどこで、どんな風に現われるのか。

この実験期間は五日間。集団実験室で与えるエサは一日一時間三十分。この制限時間内では五頭の中の一頭は満腹できても、三頭目以下は餌の欠片さえ手に出来ない。それがニホンザルの習性、厳しい掟ということも出来る。結果は明快に出た。五頭の間の順位は厳格、五番目のサルなど、実験最終日の五日目には床の上を這って歩くほどだった。

私達二人の研究者が求めていた回答が出ていた。ニホンサルの牡の間に来る順位に頭の良さ悪さは余り関係がない。その代わり、物事に当たる体力と気力、特に気力の方がそこで決定的な役割を果たしている。

歴史上に残る有名な支配者の言葉に、

—私の辞書には負けるとか敗北するという言葉はない。—

というのがある。それはまさに、この研究結果にも相通ずる。

この最後に行った集団実験については少なからぬ批判もあるだろう。実際、私達若い二人に向かって、上司の女性の助教授はもうその辺で止めて欲しいと言いついていた。

実験内容の適切さを抜きにすれば、この五日間に及ぶ集団実験から興味深い現象が次々に現れた。その一つが底辺に生きる弱者の生き残り戦略。他には餌を独占しつづけるボスサルを騙し、残りの四頭が上手い芝居をやつて餌にあり付く、という驚くべき現象も捉えることが出来た。

ただし、それらは瞬時に次々と起こる現象故に、ここでは割愛の道しか残されていない（後述）。

限られた状況や実験室内の話とはいえ、人間飼育されたサル達の姿は様々な印象に残る。ただやはり、人間に歪められている彼等を知れば知るほど、一体、純野生のサルとはどんな生き物か。我々人間の身勝手な圧迫を受けながら、彼等の野生はどこまで残り、いつまでそれを維持出来るのか。

私にはその点こそ無視出来ない、重要かつ重大な問題だった。

(三) 野生ニホンサルの姿

昭和四七年末、私の下北通いが始まった。不毛に近い大地、吹き荒れる津軽海峡の風雪。貧し過ぎるほど貧しい人々の暮らし。

磯に浮かぶ色の禿げた小型木造船。瓦でも金属のトタンでも材料で屋根をふく家々、そこに並べられた子供の頭程度の置き石の数々。一幅の風物詩といえはそれまでだが、自分の大学のある札幌を基準にして考えるとき、下北はまさに辺境の地。本州最北端の荒涼とした世界だった。

—、こんな所で何故、人が住んでいるのか？—

そんな疑問が身に付いて離れない。

京都大学の研究所で行った実験的研究から、ニホンザルについて貴重な成果があったのは素直に認める。だが、そこで相手にしたのは人間に飼育されたニホンザル。しかも、研究の場面も我々人間が勝手に作った人為的環境。果たしてこれでいいのか。本当のサルはもつと別な姿をしているのではないか。純粋な野生の姿が見たい、知りたい。それがなければ、京都大学での研究成果が正當に理解出来ない。

そんな思いを抱いて出掛けたのが下北半島。先駆していたある京大の研究者から、下北半島の北西部にはまだ、純粋に野生で生きるサルの群がいるという。現地の関係者から聞くと、少なくとも三群はいるようだが、中でもM群と呼ばれる群れが純粋さにおいて卓越している、と聞き込んだ話が私を現地に駆り立てる。

地元的事情をまず知るために出掛けた時から、私の傍には仙台洋八さんがいた。相手からの自発的な申し出に、私が甘えた結果だ。

洋八さんは青森営林署の森林監視員。立場は囑託だった。だから彼は冬場になると自由に動けた。そして、下北の森林だけでなく、ニホンザルや日本カモシカにも人一倍の興味を抱きつづけた彼の体験的な知識と経験こそ、私にとつてかけがいのない事前情報の一つだった。

昭和四十九年が終わるまで、私は毎年夏と冬の休みに下北へ出掛けた。期間は各々一カ月。その間、すぐ傍に彼がいて、私の下北研究の足場を作りつづけてくれた。

だが、不思議なことに、下北の北西端に広がる地域一帯の生き字引と自他共に認められていた洋八さんとの山行きで、一度もサルの遠景さえ見られるチャンスはなかった。不思議だった。でもやはり、それが事実だった。

昭和五一年二月後半、一人の学生を伴って出掛けた下北半島で、京都大学の現地担当者だった足澤君に出会った。彼は私より二つ若く、下北で山小屋を建て、一年中そこをベースにサルの調査をつづけられる立場にあった。

ところが、海岸から七キロ山に入ったところにある彼の山小屋に泊まった翌朝、あれだけ探しつづけたサルの群が目飛び込ん出来た。

サルはまさに山小屋を取り囲み、向こうから新来の客に挨拶する、いった雰囲気だ。

嬉しかった。涙も目に浮かんた。

「初めまして、よろしく。」

思わず、私は心からの挨拶を返していた。

足澤君は下北の山も海も好きだった。だから一年中、彼は下北を歩きつづけていた。彼はまた、一日の疲れを癒す夕べの酒も好きだった。常に笑顔を絶やさず、毎晩遅くまで下北の山と海とサルの話を語る男だった。

出会って間もなく、そんな彼に話し掛けた。

「足澤君、ここのM群は毎朝、君挨拶に来るのかい？」

すると彼は、いつもの微笑みを浮かべながら、こう答えた。

「そんなこともないですよ。でも、彼等サル達が山の精なら、俺も山の精と
いうことになるかな、……。」

「それで両者の関係はどうなの？」

私の質問は一種の冷やかし。彼が一体、どう答えるのか。待ちながら、こ
ちらも自然に笑いがこぼれる。

「さて、どうかな。俺はM群に特別な想いを寄せているけど、彼等の方が俺
のことをどう思っているか、まだ聞いていないなあ、……。」

私は彼のこうした言葉の中に、一人の男の真性を見た、と思った。

―足澤君は下北の自然に溶け込み、M群のサル達とも多分、親しい友人・知
人として生きている。―

彼を巡る情報はまだ不足しているけれども、疑いの余地はなかった。

その時から新たに始まった下北研究で、私は純野生といわれるニホンザル
の真相を知ることが出来た。

山中の森林地帯に生きる彼等は、人間が作物をつくる畑は元より、柔らか
い草や木が豊富にあっても、決して四膳木が伐採された地域に入ろうとしな
かった。

毎日、毎日、彼等は集団で移動を繰り返し、眠る場所（泊り場）を移した。
木の実や若芽に手を伸ばし、多くの時間、食事に没頭する。しかし、午前八
時前後の活動開始からしばらく経つと、牝を中心にした家族は各々別れて休
息をとった。

そんな時、母親と少し大きくなった娘は木の太めの枝に身を委ね、うたた
寝を始めることが多い。他方、元気盛ん子供達は違う。

仔ザル達は親元を離れ、木から地面に下りて同世代の仲間と出会う。そし
てすぐ、子供らしい遊びを始める。

陽気なレスリング、追いつ追われつの追跡劇。優勢と劣勢の立場はくるく
る変わる。弱者も強者も、そこにない。平和で、穏やかな世界がそこにある。

仔ザル達はその時間、威嚇や攻撃といった負の側面を現さない。叫びや声
は常に抑えられ、巡るましい相互運動の間、予想外の静寂と平和が辺りを包
む。

そこである日気が付いた。自然の中で、無数にある木の芽や実を食べる間、
彼等は争う必要がまったくないのだと。また、木から木を日中渡り歩く彼等
にとって、互いの表情を視覚で捉える替わりに、彼等に必要なコミュニケー

シオンでは耳、すなわち聴覚が最も重要なんだと。

人間および人為的匂いのすべてから身を隠し（足澤君を除く）、森の精そのままに生きる平和で静かなサル達。そこには強者も弱者もなく、いびりも苛めも見当たらない。その上、群れを常にまとめる一頭の牡リーダーがそこにいる。それが純野生のサルの群生活だった。

（四）野生の破壊と消滅

太平洋戦争での敗戦直後、日本の若手研究者の多くは戦勝国アメリカに目を向けた。その反面、ごく少数の研究者の中に日本独自の研究分野を探そうという動きも起こった。その一つがニホンザルの研究に取り掛かった京大のグループである。

昭和二十年代半ば、すでにその存在を認められていた京大グループのリーダーはかの有名な今西錦司先生。その一番弟子に河合雅夫・河村俊三・井谷純一郎の各氏がおおり、井谷さんはニホンザルからやがてチンパンジー関心を移し、京大のアフリカ研究グループを率いた。

ニホンザル研究の第一世代を河合さん（後日、京都大学系鳥類研究所所長）達とすれば、年齢的に一回り下の第二グループには東・井沢といった人々が名を連ねる。

私より数歳年上の東・井沢両氏は今西先生の指示を受けて青森県の下北に向かった。時代は昭和三十年代半ば。下北はその時、戦後の復興から取り残され、寂しく侘しく、さらに貧し過ぎる程貧しく沈んでいた。

東京から北約八百キロ。国道四号線の尽きた果てから下北半島が始まる。それでも、半島の根元もしくは入り口に当たると大畑町までなら、当時でもJR（当時の国鉄）が走っていた。しかし問題はその先。

少し大きめの日本地図を見れば、下北半島の地形が分かる。中央から海岸に向かって恐山などの低い山岳地帯が広がり、その先端は百メートルを超す急峻な断崖がそのまま狭い海岸線になだれ込む。だから下北半島では、海岸線ですら、人の移動の障害となる。

江戸時代に始まったといわれる北海道の鯨漁業。冬の終わりから始まり、春先に漁を終えるその鯨漁業に、この下北半島から実多くの男達がヤンシューと呼ばれて毎年出稼ぎに行った。

約四カ月の激しい労働でヤンシューが受け取れるのは米一俵と二、三本の塩サケ。それでも下北の人々は毎年、毎春、北海道に出掛けて家族の飢えをわずかに支えた。

その同じ下北の中でも、半島の南西端にある脇野沢村に世界で一番北に生きたる霊長類、つまり通称、最北限のサルと呼ばれるニホンザルが棲んでいた。

僻地の中の僻地、秘境といえれば秘境の典型。だからこそ、日本の各地で人間に追い詰められたサルにとつて、そこは楽天の地になっていた。

昭和五十年代前半、私が脇野沢村の小さな一集落を訪ねた折り、疎らな人家の屋根や畑に十数頭のサルを見つけた。

狭い菜園の中で老婆がイモ掘りをしている。そのわずか横でサル達が少し警戒しながら、自分で掘り出したイモを食べる。

「あれ、サルを追い出さないの？」

私は思わず言った。すると、考えだにしなかった言葉が相手の老婆の口から返ってきた。

「だって、サルも人間だべさ。やっぱり、腹も空くだろうさ。」

「でも、それじゃお婆さん困るだろ？」

「仕方ないのさ。昔からこうだもの。だけど、私も時々言つてやるのさ。こつちの分は残しておけて。」

「うーん、そうなんだ。じゃここでは、サルやカモシカと人間と一緒に暮らしているんだね？」

「そう、そういうことさ。この人達（動物）でもいてくれると、寂しさが紛れるからね。」

サルは人だという。だから、余りの過疎で人の恋しい地元民にとつて、菜園を荒らすサルやカモシカでさえ、大事な隣人だということになる。

私より先にこの脇野沢へ来た東さんや井沢さんも多分、同じ場面で同じ言葉を聞いていたのだろう。そして私以上に心を痛め、頭を痛めていたに違いない。

その結果、彼等は地元民とサル達の好ましい共存関係の設立に思い立った。まず環境庁に働き掛け、この地域に住むサルに限って特別天然記念物の指定を勝ち取った。それから、大分県の高崎山や宮崎県の幸島の例に倣って、餌付けという手段でこの小さな集落からサル達の生活の場を他の地域に移すことを考えた。

サルの研究者である二人にとつて、餌付でサルの生息地を移す作業など、難しいことではなかった。望むべき結果はやがて出た。しかしそこには、将来に問題を残す落とし穴があった。

数年後、気が付くと、サルの個体数がどんどん増えている。だからといって、餌を減らせば、飢えたサルの一部がまた、貧しい集落に戻るだろう。だが、それは出来ない。

昭和四十年代の終わりから五十年代前半、餌付けの結果としてサルの数は限界に達した。地元の集落はおろか、脇野沢から近隣の村落に向かつてサルの生息域が広がったのだ。

新たな農業被害問題が地元から青森県に、さらに県内から日本中に知れ渡

った。その結果、餌付けに慣れたサル達すべてを一網打尽にして、困いの中で餓い殺しにする、という残酷な話が一気に進んだ。

昭和五四年三月、急死していた洋八さんも、精神病で倒れた足澤君もい下北に私はもう一人別の学生を北大から連れだした。しかしその時、下北にはもう、人間から姿を隠すサルはいなかった。その代わりに、若い未知の牡が複数、突如M群の前に姿を現した。

彼等はまったく人間を恐れなかった。ただ、注意をM群の動きに集中し、スキーを履いて動く私や学生のすぐ脇を擦れ抜けていく。

そこにはもう、純野生のサルという言葉は通じない。彼等はまさに、典型的な餌付けザル。最早、私の拘りも通用しない。

そう思っ調べてみると、M群に所属する個体数がいかにも多過ぎるようだ。私が足澤君と調べた限り、このM群の数は三十という数字の上下二頭で常に安定していた。それが自然なのか、正常なのか断言は出来ない。しかし、今日の前にする群れを調べると、四十数頭という数字が出てくる。

—これはやはりおかしい。地上からニホンザルの純野生群は消えるのだ。—
—そう思ったとき、私の下北熱も一気に消え失せてしまった。

丁度同じ頃、大間原発関連の予備調査がM群の生息地一帯に広がった。測量班がトラックで入り込み、至る所で杭を打った。

私にとって、それが駄目押しになった。

「先生、助けてよ。ここの人達は物をよく考えられないから、原発の反対運動なんてすぐ潰れるの。だから先生、ここに移ってみんなを説き伏せてよ。」
仙台タキさんの悲鳴ともいえる叫びは耳に堪える。しかしはいそうですかと、YESとも言えない。地元住民が一致協力してくれるなら、社会的もしくは国家的事業といえども、一矢程度は報いられるかもしれない。だが、国家や県が全体安全だといいい、賛成なり協力すれば、これから先長く大金を地元にはば撒くと言われたら、過去も現在も未来さえも、貧乏と過疎が約束されているような地元民にとって、原発反対運動など、いつでもすぐにも捨てられる。

あれからかれこれ三五年の今、対岸の函館山に登って双眼鏡をのぞくと、大間原発の雄姿(?)がはつきりと見える。建造物だけでなく、そこで働く作業員や車の動きさえ、見たくなくとも目に入る。

福島の悲惨な原発事故にもかかわらず、我が国は原発再稼働への道をひた走る。人間というサルの仲間は不思議な生き物だどつくづく思う。思いながら、自分もその一員に過ぎないという現実、心が重い。しばらく下北を離れ、北海道を基盤にした一連の研究に没頭するしかないと思うと、言葉にならない苦悩が全身を包む。

やがて、四十歳を迎える。野生動物、特にアラスカでのオオカミ研究に全

力を尽くすつもりでも、体力と気力の限界が近付いている。後十年余りで五十歳、それが自分の限界だと思う。足元から腰に掛けて、弱り掛けた身体が本人に告げている。

「余所見をする時間はもう無いに等しい。分かっているのか？」
誰か姿の見えない人間の声が聞こえる。

(五) 新しい学問の設立

太平洋戦争の敗北で日本全国が日々の食糧不足に悩み、都会も工場地帯も灰塵の中に眠る時代を迎えた。それが経済の再生を最優先とする国家経営の下で、急激な回復を迎えたことは今更論を待たない。

しかし、明治の近代化運動から戦後の現代に至る経済戦争の下、我々日本人の間に大きな貧富の差が生まれた。それと軌を一にして、学問と研究の分野でも大きな変動が起こった。戦前に栄えた分野が消え去り、替わって新たな分野が勃興した。

ドイツ医学を基本としていた我が国の医学は突如、米国の医学に見習う方向に変わり、絹の生産に直結する養蚕学が農学部の一隅に追いやられた。

視点を工学部に移すと、戦後最大の変化は原子力研究分野の成立と、その急激な発展だったかもしれない。そして我が文学部でいえば、東洋哲学や印度哲学の低迷に合わせて、新たに行動科学という新分野が文部省の認可を受けた。

調査社会学と文化人類学、基礎心理学に実用的な応用心理学、そこに動物の社会や生き方を研究する新分野を加えると行動科学がで上がる。

規模は学部には及ばないが、長い文部省との交渉の結果、その新分野が北大で初めて学科として認められ、私の動物研究にも一つの講座が与えられた。

当時は昭和五十年代の半ば、私は三十代の半ばを迎えていた。ある日、新たな学科で総指揮を執る戸田教授から先生の研究室に呼ばれた。その頃、少し浮ついた気分浸っていた私は戸田教授らと毎週ゴルフに出掛ける仲間だった。ところがその時、敢えて研究室に呼ばれる理由については、何一つ分からなかった。

「鈴木君。」

タバコ好きな先生は一本の葉巻を啜えながら口を開いた。

「はい、何かご用でしょうか？」

「いや、差し当たっての用じゃない。今日は特別な話がある。君に一つの講座をやろう。」

「・・・・・・？」

「実はね、我々の申請していた行動科学科について、文部省から突然認可が

下りた。こちらが最初から要求していたのは一学科で六講座だったんだが、文部省は何故か、あと一講座増やして七講座まで認めるといつている。そこで我々数人で話し合い、独自の視点で野生動物を研究してきた君に、その一講座を譲ろうと決めたんだ。どうだい、近々文部省にこちらの最終案を提出するから、それまでに講座の名前と研究の具体的内容について、君の意見や考えをもとめておいてくれないか。」

「まさか、嘘や冗談でないのか。私は自由にやれといわれたから、自分の信念だけで独自の研究をつづけてきただけだ。だから今、その研究に学問としての名称をつけ、しかも、その輪郭すべてをまだ助手の身分に過ぎない私に任せるなんて、信じようにも信じられない。――

しかし結局、私は戸田教授の指示に従った。どう考えても、その話を断る理由などまったくなかつたからだ。

名称は社会生態学。これは国内ばかりでなく、世界に先駆けた学問分野だとその当時思っていたが、後日、期を同じくして外国でも同名の学問領域が始まっていた。

それはともかく、学問の具体的内容をまとめ上げる仕事はきつかった。提出先が政治団体や財界団体なら誤魔化せる。しかし、文部省の背後には学者・研究者のお歴々がいる。それは一体、学問として成立するのか。他の分野がすでに同じ内容の研究を始めているのではないか。人間の会生活と動物の社会生活を比較検討したところで、一体どんな成果に結び付くのか。

研究内容の詳細をまとめるに当たって、そんな叱責が聞こえてくる。それでも、心のどこかで私には自信めいたものもあつた。

「我々人間は本来が動物と違う。だから違いがあつて当たり前。なのに何を今更、・・・・。――

それが人間の常識。社会一般の人だけでなく、先駆けたニホンザルの研究者にしても、その背後にやはり同じ思いが共有されている。だからそこに、私の研究が新たに入り込む余地も十分残されている。

男と女は違う。子供と大人にも違いがある。それが仮に事実だとしても、それをいうには男についてよく知り、女についても相当な理解力があることを前提条件にする。それはまた、大人と子供の話についても同じことがいえる。

がしかし、誰かが人間と動物は違うと主張するとき、その人物が動物一般の基本的事実について、必要十分な知識があるとは思えない。

事実、歴史や文学や哲学分野の権威者ほど動物に対する無知、無関心は甚だしい。今、テレビで野生動物の番組を見ているだけの子供達と比べても、彼等の無知は批判に値する。

そのとき私は、この点に活路を見出した。講座名はやはり社会生態学でい

い。実質的な内容は比較社会学（動物と動物、あるいは動物と人間の比較）と比較文化人類学。二つの共通点は現代社会から置き忘れられた世界でのフィールドワーク。物証もしくは実証を旨とする新たな人間学。そこに生態学手法と発想を組み入れる。これでいい。これで文句はない筈だ。

研究室全体でまとめた構想は文部省内でそのまま認められた。それが昭和五十三年。学科専用の新設研究所が即座に立ち上がり、一年遅れた昭和五五年から学科全体で定員確か五十名程度の学生を募集する段階を迎えた。その時、京都大学の霊長類研究所から戻った私の年齢は三七歳だった。

（六）オホーツク海のキツネ

私のイメージする動物研究では、常に人間という存在を頭の片隅に置いておく。そこが伝統的な生物学や生態学と根本的に違う。

京大の霊長類研究所から一年振りに自分の大学に戻った。すると、新設された講座の運営責任を担う立場になった私の前に五人の見知らぬ学生が待っていた。一人は女子、残る四人が男子だった。

それらの学生を前に、私ははからずも当惑していた。長かった助手時代、自分の研究は怠っていない。それは胸を張って言える。だがふと気付いたとき、私には自分の分野で学生を教える、という面が完全に欠落していた。

人間という存在を意識しながら動物を研究する。とすれば、研究対象が限られる。その点では、かつての野良犬研究も下北でのニホンザル研究でも問題は無い。しかし、五人の学生達のために北海道の中で新たな研究対象を探すとなれば、話が難しい。

相手の動物には、ある程度の知能が必要だ。なんらかの形で人間との接触があることも、集団性や社会性が相手にあることも無視出来ない。さらに学生の教育と研究者の研究は本質的に異なる。

大学三年で私の手元に来る学生が卒業までに許される時間は二年弱。しかし、研究の相手をよく理解するためには動物の生活史、つまり産まれてから成長・老衰・死亡までをフィールドで調べるのが前提となる。もつと別の条件も考慮する必要がある。

数日間、あるいは一週間考えつづけた。五人の若い学生を全員下北に連れ出すことができれば問題は直ちに解決する。過去十年余りの調査結果を抱える足澤君がいるから、M群に所属するサル達の素性をまず学生達に語ってもらえる。だが、諸々の事情を考え合わせると、それも出来ない。

考え、悩み、そしてあるアイデアが頭に浮かぶ。キタキツネ、今それこそ、学生の教育に最適なものはない。

日本中にキツネはいる。しかし、津軽海峡の先にキツネの十分な観察を許

す世界はない。人口が多いこともそうだが、山岳地帯が海岸に迫り、キツネの観察に適した大平原や平地の面積に欠けている。その点、広大な面積を抱える北海道は違う。大地を動き回るキツネを一時間や二時間追い掛けることなど容易なことだ。

その上、僻地で暮らす人間とキタキツネは古くから共存共生関係をつづけて来たから、相手がキツネの専門家でなくとも、過去から現在に至る確実な経緯を語ってくれる人も多分、いるだろう。

北海道は確かに広い。過疎もしくは無人地帯だつて探し出せる。しかし、キツネの狩猟が盛んな地域は困る。それに、何らかの地形的障害が観察を妨げるようでも困る。

そこでまず、最初の年の夏休みに五人の学生を連れて巡礼の旅に出掛けた。その途中、擦れ違ったトラック運転手に、

「あんた達、旅回りの芸人かい？」

と声を掛けられ、みんなで笑った。それから雨の降りつづくオホーツク海岸で黙々と歩いていた時、気が付くと背後に列車が止まり、私達が気付くのを待っている、という場面にも遭遇した。

その年の冬休み、私達はまず、日高山系の西側にある平取町に出掛けた。この町の近くには今や恐竜の化石が発見されることで有名な幌別町と隣り合うが、私達にとつては古くから有名なアイヌ集落の町として関心があった。

明治時代からそこに一人の外人が来ていた。僻地医療に関心を抱く医者であると同時に、アイヌ人の生活や文化の造詣の深い民俗学者でもあった。

名前はバチュラー、長年そこで医療活動つづけた後、日本を去るに当たつて自分の所有する施設すべてを私の大学に寄贈していた。

確かに、平取のアイヌ集落には豊かな自然があった。そこを南北に流れる沙流川では一度、一面の銀世界に佇むアカシヨウビンの姿さえ見ることが出来た。

だが、幾ら多くの野生動物が棲み、キツネの姿や足跡の絶えない場所であっても、調査や研究の面から言えば、観察可能な空間がやはり狭すぎた。

そこで翌年から、私達は研究の場を網走の能取岬に移した。北海道の中部からさらに北東へ向かって広がるオホーツクの海岸、そこは典型的な寒冷地といいながら、眺望の効く平原が無限に広がる。しかもその近くには獣医師をしながらキタキツネの研究に豊富な経験のある竹田津実さんや、ポツンと一つ取り残されたような売店があつて、仲良く働く三人の方々がキタキツネと長年、好意的に付き合っている、という好都合な条件も揃っていた。

調査を始めた一年目から、キタキツネのある一家について貴重な情報や知識が積み重ねられた。人間の感情や感動を誘う様々な現象が理想的な形で浮かび上がった。

昭和五九年夏、ロシアのカムチャツカ半島沖で起こった大韓航空機墜落事件の慌ただしい余波で調査地一帯が混乱させられるまで、学生達も私も、毎月のようにそこへ通った。

その成果は最初の学生五人の卒論になったばかりでなく、後続する学生達の卒論や修士論文の貴重な資料として残された。また、その内容が一般の日本人にも分かり易く、共感を呼び得るという考えから、北海道を代表する民放HBCと相談の上、TVの動物ドキュメンタリー番組にまとめてもらった。後日、その番組はキー局TBSに取り上げられ、確か昭和五九年の大晦日直前の夜、特別番組として放映されている(岬の花子)。

能取岬での観察結果は一人の研究者の眼から見て、重要かつ貴重だった。子育ての多様さ、子別れという儀式的厳しき、牡と牝の複雑な関係。そしてなによりも、老いの目立つ時期にだけ見えて来る老婆と娘・息子・孫の世界に見られる感動的集団生活において、キタキツネは柔軟で独特な社会を構築しているという具体的な観察事実など分かり、私にとつて生涯忘れられない成果をもらしてくれた。

最近、その一部を地方の大衆季刊誌BY・WAYに書き遺した(キタキツネの夜嘶)。その内容を詳細に書き直すとすると、膨大な紙面がある。だからここでは勝手ながら割愛する。

(七) 明治時代に絶滅した蝦夷オオカミ

今の北海道が蝦夷地と呼ばれることがあつた明治時代の前半まで。以来、北海道は東京中心の国家から特別な地域、または場所として常に注目され、毎年、驚くほど多額の国家予算が投じられながら今日を迎えた。

明治時代の半ば、その蝦夷地(北海道)である貴重な野生動物が姿を消した。明治二四年、札幌市郊外の白石村(現在の白石区)で補殺された一頭のオオカミ、それがエゾオオカミの最後だったという。ただ、動物なり植物の一種がある日、ある年に絶滅したかどうか、厳密に決めるのは難しい。

本州以南に長く生息した本州のオオカミの最後が確か明治三七年と聞かれることがある。だとしたら何故、エゾオオカミの絶滅が先なのか。和人といわれる人々の到来と同時に、ヒグマと並んであれほど逞しい野生動物がそう簡単に絶滅したのか、あるいは人間側の特別な意図、もしくは意志によつて消滅させられたのか。これは十分、検討に値する。

明治二四年といえば、人口は今の十分の一以下。しかも、社会的インフラの整備は微々たるものに過ぎない。

蝦夷地の屯田兵に手渡された武器は単発の銃に軍事用のサーベル。全域原始の森に覆われた当時の北海道で、人間の多くがヒグマに怯え、決して広大

な大地の支配者ではありえなかった。それでも、人間の意図によってエゾオオカミは急速に絶滅へと向かったのだろうか。

本州の山間僻地に近付くと、各地の神社やお寺で犬神様とか山神様に由来する石像や木像に遭遇する。しかし、製作者のどんな腕でも、それらの像から恐怖感は生まれない。それより、私などは微笑みさえ浮かべてしまう。

そうした一連の犬神様や山神様を眺めていると、ある共通点に辿り着く。

―製作者はオオカミの実像を知らない。―

―日本人は昔からオオカミを単純に恐れず、親しみすら感じながら敬ってきた。―

今から三十数年前(昭和五三年)、三重県大台ヶ原の一角で、オオカミの出現騒動が起こった。話は下らない結果で終わったが、現地に関係者として呼ばれた私の頭から今以って忘れられない言葉がある。

「先生さん、本当でも嘘でも、あれは大台ヶ原に昔から棲んでいるオオカミの子孫だということにしてください。だって、私達ここで生まれ育った人間にとつて、目の前に見える山の奥にオオカミが棲んでいるかもしれない、と思うだけでとても嬉しいんですよ。夢でもいい、嘘でもいいからそう信じて生きていきたいんです。どうか頼みます。」

そう言ったのは、大台ヶ原の最深部にひっそり佇む集落で一生を終えそうな八十前後のお婆さん。

それは確かに理窟に合わない。にもかかわらず、その言葉には重みがあり、軽く扱うことも出来ない。

ともかく、千年以上も前から我々日本人の祖先がオオカミという実際出会った経験のない動物について恐れではなく、ある種の親しみと敬虔な心で向き合っていたに違いない。

なのに、本州のオオカミは明治時代の後半まで生き延びた。そしてエゾオオカミの場合はもつと前に、未開の地北海道で絶滅してしまっただけという。では、少なくともエゾオオカミについて、絶滅の理由や原因はなんだったのか。

二十代の終わりから、私にはどうしても疑問に思われた。道庁の古い記録や関連する文書にも目を通した。が、調べれば調べるほど、過去の出来事はすべて、適当な信頼出来ない話で終わっている。

北海道の新規開拓で招請した米国人の指導で、エゾオオカミは毒殺された。懸賞金に釣られて、多くのオオカミが人々に殺された。伝染病のジステンパーが蔓延してオオカミは絶滅したのではないか、大雪で主食の餌になるシカが一気に数を減らしたから、等々。

しかしそのどれもが怪しい。客観的に言つて、理窟に合わない。例えそのすべてが同時に並行して起こったにせよ、それはオオカミという動物の減少に繋がっても、絶滅までには至らない。

机上の計算に頼り切ると、減少の先に絶滅という答えも見えて来る。だがやはり、エゾオオカミの絶滅問題ではもつと他の面から検討されるべきだと私は思う。

少なくとも最近まで、オオカミの研究自体が最も難しい問題だ、と言われてきた。だからそこに絶滅という悲しい現象があつたにせよ、もつと彼等の真相に迫る研究が先ずもつて欠かせない。私はそう考え、一人の動物研究者として人生における究極の課題に位置つけた。

年齢は三五歳、昭和にすれば、五五、六年の話になる。

(八) 新たなオオカミ研究の基礎作り

私がエゾオオカミ研究に目覚めた頃、エゾオオカミばかりか本州に元々棲んでいたホンドオオカミも遙か以前に絶滅していた。その上、エゾオオカミの仲間はヨーロッパ大陸ばかりか、五大湖以南のアメリカでも、ほぼ壊滅状態にあつた。

残るは北欧とシベリヤの一部、および北緯六十度より北の大地。アラスカとカナダに広がる世界にある「程度の生息が認められていた。とすれば、私の選ぶオオカミの研究地は日本から少なくとも五千キロ先の荒野もしくは原野ということになる。

一九八〇年(昭和五五年)、アメリカの灰色オオカミ(エゾオオカミの仲間)に関する基礎的な研究結果が一冊の本として出版された。タイトルはまさに『オオカミ』、著者はアメリカでオオカミ研究の権威者といわれたミーチ博士(Dr. D. Mech)。野外生態学者だつた彼の記述はまだ、まだ大まかで、オオカミの特徴的な生態や社会、さらに行動上の習性など、断片的な紹介の域を出ていない。

しかし、そこにあつた記述の多くは、白紙状態の私にとって、貴重な参考資料の宝庫だつた。特に、オオカミは決して人間を襲わないこと。研究者が確認した範囲で群れの大きさは最大で二三頭を超えず、通常なら八頭から十頭前後だという記述は印象に残つた。

同じ本の中で博士は一群のオオカミが占有する土地の面積が二千平方キロ、一日の最大移動距離も百キロに達する、と述べている。しかもその大地は厳しい寒さの雪と氷の世界。私もしこれからオオカミの研究に出掛けるというなら、その点の克服が欠かせない。

新たに自分の大学で設立出来た学問を前提にしたとき、私はどうしても間近な距離からオオカミの家族生活の克明な実態を是非知りたい。夫婦の日常生活、子育て、成長する子供と両親の関係、子供の自立に関わる諸々の要因。

さらにいえば、一匹オオカミの運命等も現地で野生動物を追い掛ける人々に聞いてみたい。

丁度その時期、私はやむなく下北研究から身を引いていた。その替わり、学生達の教育を兼ねたキタキツネの現地調査に多くの時間を費やしていた。そうした中で、まだ見たことのないアラスカオオカミの姿が私の頭から離れない。しかもその姿は日々大きく成長し、落ち着いていられない。

そこでまず、時期が冬だったから、中学一年の息子を誘ってクロスカントリースキーを始める。最初は一日一回の五キロ。その距離を毎週伸ばして、冬の終わりは二十キロ。しかしまだ、一日百キロは見えてこない。

それから翌春、スキーを外して陸上の長距離ランニングに移る。勉強は嫌いだ。スポーツ万能の息子は中学二年。これも最初は数百メートルで息が上がる。それを何度も繰り返して、合計五キロで一日を終わる。

両足の筋肉ばかりか、両腕の筋肉にも毎日痛みが残る。それでも、距離はどんどん伸ばさなければならぬ。

生意気で若さの溢れる息子には不満が見える。

—なんだ、この親爺は、……—
それもそうだ。これではいけない。

豊平川の河川公園を南北に走っていた時、ふと脇を見ると、トライアスロンに興ずる人の姿が見える。少なくとも北国の札幌で見ると、その競技は目新しいものだ。

「あれをやるか。その方が体力作りに役立つそうだが？」

ふと思いつき、脇を走る息子に声を掛ける。

「やろうか、面白そうだ。」

「よし、これはもう止めよう。競技用の自転車と水泳パンツを買いに行こう。」私の腹は決まった。それからすぐ、私達親子の新たな体力作りが始まった。

次の冬、北海道の中央部に聳える大雪山からオホーツク海に向かう途方もないスキーマラソンの大会が開かれるという。距離も概ね百キロ。その距離、その数字に魅力がある。即刻、大会本部に二人分の参加を申し込む。

大会の当日、大雪山麓のスキー場の出発点から、初めは斜面を下るように滑り降りる。ただし、降りた先はまったくの平地。これで果たして、百キロ先のゴールに辿り着けるのかどうか、不安が広がる。

途中、JRの駅を幾つも越える。真冬だというのに、下着は上下とも冷え切った自分の汗でやり切れない。それでも、辺りがすっかり暗くなった時刻、どうにかゴールに辿り着く。

先に楽々ゴールしていた中学二年の息子が疲れ果てた父親を見て笑っている。冷たい笑いのような気がする。

—この野郎、……。—

と思わず叫びたくなるが、体力も実力も劣っているから仕方ない。だが、それでも私は今日、一日で百キロの距離に耐え切ったのだ。

—これならやれる。—

そう考えると、腹の底から満足感が湧いてくる。頭の片隅に広大なアラスカの大地が浮かぶ。

(九) 精神修養

気力は最初から充実している。欠けていた体力・走力についてもある程度の目途はついた。ただ、オオカミの棲む世界まで出掛ける上で、もう一つ大切な鍛錬がある。あそこは多分、医者もいなく、道路もなかるう。だから、緊急事態で助けを求めるのは諦める。

諸々の条件から、研究の場所はアラスカの内陸部に決める。そこでは、あの悪名高いグリズリーとの出会いが考えられる。オオカミの群との遭遇は好機であると同時に、彼等が間違いなく人間を襲わないと言われても、心のどこかに不安が残る。

野生の大地で幾らかでもこちらに不安なり恐怖が起こると、それが相手の攻撃を誘うことは十分に考えられる。だからといって、ライフルやショットガンを抱えてオオカミの研究は出来ない。いや、してはならないと私は考えている。

出会う相手のオオカミに不安を与えず、攻撃心も起こさせない。それが必須の条件とすれば、研究する側に欠かせない条件が最後に残る。それが不動の精神力を身につけること。

もつと穏やかな環境で野生の動物を研究するとき、元々枯れ木戦法という戦略が知られている。相手と否応なく接近してしまうとき、動かず・恐れず・脅さない。そうすることによって、両者の無難な関係を維持しようという作戦だ。

この枯れ木戦法は少なくとも下北半島でのニホンザル研究で成功している。しかし、相手と単に短い時間擦れ違うだけなら、これでもいいだろう。ところが場所をあの広大なアラスカに移し、相手がグリズリーやオオカミ群れともなれば、問屋はそう簡単に終わらない。

内心の恐怖で身体は硬直する。果たしてそれが動かないと言えるのか。それは動かないのではなく、動けないだけなのだ。だから多分、それでは野生の研究で役立つ筈がない。

同じことは他の二つの条件にも当てはまる。アラスカに広大な原野で唯一人、あのグリズリーに出会ったとしよう。その時、相手は大自然の王者。こ

ちらはしが無い無力な人間。だから、好むと好まざるとにかかわらず、恐怖は向こうからやってくる。そこでは人身に漲ってしまう恐怖は抑えられず、脅すとか脅かすという話は論外となる。つまり現実的に、アラスカの研究には枯れ木戦法が使えない。ではどうする、………？

同世代の多くの日本人同様、私は宗教を持たない。どんな神もどんな仏とも無縁のまま生きている。神社や古い仏閣の広い境内を歩くのは好きだが、神や仏に手を合わせようと思はない。ただ、欧米の社会に大きな影響を与えているらしいと思ひ、旧約聖書には何度か目を通してはいる。

その中にイスラエルの神がまず人間を造り、その人間が都合よく生きれる世界として、家畜や、果物や作物を作れる大地を与えた、という記述（創世記）は欧米人の基本的な思想を理解する上で役に立った。

もう一つ、旧約聖書の中に気になる一章が別にある。章のタイトルは「伝道の書（別訳もある）」。内容はイスラエル王の中で最も神に近いと言われるダビデ王が、自分の人生を振り返りながら語ったこの世の不条理。そこには悪人が栄え、善人が牢獄で殺されることもある。幾ら資産を増やし、金持ちになっても、幸せになるとは言い難い。つまりダビデ王はこの世のすべてが虚しく、空の空だというのである。

この章を読むと、かつて日本人の社会に定着していた諸仏教の人間観を思い出す。そこに確かな共通点があると思わずにはいられない。

そんな旧約聖書との関わりから、私は札幌市内の教会にも出掛けた。母方の伯父・伯母の中に敬虔なクリスチャンがいた、ということもあつたろう。が、私の心の中にはいまさら何故、十字架のイエスがキリスト教でそれほど絶対無二の存在なのか、という自らの疑問に納得出来る答えが欲しい、という願ひがある。

積極な形で教会に通うようになって二年、誰もいない礼拝道の片隅、私の心は満たされなかった。その代わり、十字架のイエスを見上げていた時、自分にとって死はそれほど怖いものでない、という過去の実績（？）が思い出された。

高校二年の自殺。それが結果的に失敗したとはいえ、あの時、自分の人生が終わったとしてもおかしくない。かえって、こうして今、生きていることが不思議なのだ。だとしたら、自分の信念に殉じ、無人のアラスカで死を迎えたからだろうかというのか。それこそ私という人間にとっては幸せであり、最高の人生なのではないか。そう思い至ったとき、アラスカへつづく大きな関門のすべてが影を潜めた。

こんな私の話を聞けば、

「なんて無責任な男だろう？」

と思う人が多いだろう。

(十) アラスカオオカミとの出会い

十年に手の届きそうな下北での野外研究が私を変えた。元来、大学の研究室を舞台とした実験研究者の青白い姿はもうないに等しい。それに札幌でのスキー訓練と長距離走の日々が体力と気力の両面から全身を支える。精神面の課題もどうやら克服できそうだ。

残るは現地の受け皿。大学か研究所化、それとも州政府か。相手はどうでも構わない。日本からはるばるアラスカに着いた時、速やかにオオカミ研究の世界へ窓口を開いてくれる相手であればいいのだ。

そんな時、北大で開かれた国際シンポジウムにアラスカから一人の人物がやってきた。名前はJ. J. バーンズ。州の自然管理局に努める海洋動物学者で、アザラシの専門家だという。

その話を、ニホンザルとアザラシの二股をかけて研究する友人にふと囁かれ、私は一気に目覚めた。

「頼む、是非その人物に合わせてくれ。」

多分その時、私は叫んでいたに違いない。それに対して、友人は無造作に頷いてくれたのだ。

シンポジウムが終わった夜、私は妻を伴ってある市内のホテルに出掛けた。その時、心は決して穏やかでなかった。不安が大きかった。でも、そのチャンスを逃す理由がなかった。

「初めまして、……。」

当時、私の英語力は覚束なかった。

「スズキさん、アラスカでオオカミの研究が本当にしたいんですか？」

「YES, オフコース。」

するとそこに妻も割り込んで来た。

「バーンズ、私もアラスカに行きたいの。夫と一緒にオオカミに会いたい。どうか助けてください。お願いします。」

私の英語もいい加減だ。しかしそれにもまして、妻の話は英語と日本語のチャンポン。どうしたって、そんな妻の話が相手に伝わるとは思えない。

よく見ると、バーンズは私より一寸歳が上のようなうだ。小柄で背が低く、意志の強い職人のような雰囲気を感じられる。それでも彼は間違いなくアザラシ研究の権威だと聞いている。

妻の口はパクパク、手足は熱っぽいソーラン踊り。その姿を見て、相手のバーンズが口を開いた。

「OK、いつでもアラスカに一家でどうぞ。オオカミ研究の許可証も、その場所とベースキャンプに使えそうな施設も用意しましょう。ご心配なく、任

せてください。」

バーンズの顔に微笑が浮かぶ。どうやら、こちらの希望や期待は相手に間違はなく受け止められたようだ。

食事が始まり、彼は嬉しそうに日本食料理に手を伸ばす。

「私は日本料理が大好きです。それに、チャンスがあればアメリカ国内でも日本料理を楽しみます。」

—そうか、そういうことか。—

だから、私の研究内容に深入りしないんだ。これは助かる。誰でもいい、手を合わせて感謝の祈りを捧げたい。

昭和五九年夏、勇躍アラスカに飛ぶ。心気は高まり、年甲斐もなく興奮に明け暮れる。

—とうとう来たぞ。アラスカが目の前広がっている。自分だけのアラスカオカミ研究の実現に、もう怯える必要はないのだ。—

現地折衝の相手はバーンズの所属するアラスカ漁業狩猟管理局とアラスカ大学フェアバンクス校。そこにはまた北大で同じ講座の先生(文化人類学者)の親しい友人がいて、後は任せろ、と言ってくれる。

それから一年置いた昭和の六一年三月、事前に考えられるだけの準備をして再びアラスカに向かう。脇には一緒に体力強化に取り組んでいた中学三年の長男。そして何故か、普通の専業主婦のまま、訓練らしきものをさつぱりしなかった我がワイフ。

—まあ、いいか。我家で育ったあれだけ沢山の動物達の世話で、二十年近い歳月を一緒に暮らしてきたんだからな、……。—

札幌の千歳空港から成田。成田からアンカレッジ。アンカレッジからフェアバンクス。そして最終目的地トック(東京の略語、これには歴史的に深い訳がある)に向かう。時期は三月の末、アラスカはまだ、雪と氷の世界。なに何故か、私達の使う車は日本製のポニコツカー。前後四本のタイヤは擦り切れ、しかもスタッドドレスでもスパイクでもない、ゴミ溜めに捨てられたような夏タイヤ

車の室内ヒーターは壊滅、助手席の息子が絶え間なくフロントガラスの一部の氷を削りつづける。カーラジオも応答なし。

玄関口のアンカレッジからトックまでの道乗りは片道千百キロ前後。車のエンジンとフロントガラスをどうにか騙しながら、最終の目的地に向かう。

親子三人でマンسفールド湖畔を歩いてきた五月二十日、亡き長女の命日に合わせたかのように、湖畔の一角で灰色のオオカミに出会う。

現場から立ち去りかけ始めようとしていた脚を止め、じつとこちらを見ている。その姿に、怯えも怒りも見当たらない。雰囲気からして、どうやら乳飲み子を抱える母オオカミのようだ。

(十一) 国境の街トック

ポンコツカーに擦り切れた夏タイヤ。その日々がどれだけ辛く苦しいアラスカの日々だったか、今更書くのは止めよう。その替わり、アラスカの素顔を象徴するベースキャンプ地トックについて少し紹介してみたい。

アラスカ州の首都は遙か南側に孤立した場所にあるジュノー。その意味ではアラスカを人口の上で実質的に代表する都市はアンカレッジになる。この街の人口は約三十万、中心部に様々なビルが立ち並ぶ景観から、北海道の旭川市が連想される。

ただし、二十世紀初頭のゴールドラッシュ時代に遡る歴史を考えると、そのアンカレッジから北五百キロにあるフェアバンクスが場所柄にしても、アラスカの中心地といえるかもしれない。

人口十程度程度のフェアバンクスは北緯六五前後に位置し、広大なアラスカ大陸の中心ある。記録によれば、この街の最低気温は零下五十度以下まで下がるから、オーロラ鑑賞の観光地としても有名になった。

そのフェアバンクスから東二百マイルあるトックの街が、私達家族のベースキャンプなところだ。

トックは英語でTOKと書く。アラスカ住民の多くがその歴史も意味もまったく知らない。ごく一部の人々のみがこの街の成立に至る経緯を覚えているに過ぎない。

遙か南方のアメリカ本土から北に向かってアラスカハイウエーが建設されていたのが二十世紀の前半。丁度カナダ国境から入った所に設けようとしていたジャンクションに当初予定されていた名前がTOKYO(東京)である。

だが、幸か不幸か、そこでハイウエイ―建設中に、日本軍の真珠湾攻撃が起こった。それを契機に、建設関係者が話し合い、TOKYOがTOK(トック)に変えられたのだ。

人口は約千人、トックの街に立つと、東側にローキー山脈の北端部一帯が南北に果てしなく連なる。麓までの距離は何故か見当も付かない。しかし、山脈の向こうはカナダ領。人々はその地域をユーコン・テリトリーと呼ぶ。アラスカを代表する河ユーコンの源流がそこにある。

トックの街は平坦で広い。フェアバンクスに東向すると国道三十キロの辺りに少数民族アサバスカンの集落タナクロスがあり、百キロほどアンカレッジの方向に南向すると、同じアサバスカン族の集落シックスティーマイルもある。

アサバスカンはアラスカを代表するモンゴロイドの少数民族。ここトックを中心にした東西三百キロ、タナナ川に沿って歴史的な営みをつづけている。

その西端近くにフェアバンクス、東端はトックの東、北ロッキー山脈のふもとにある。

アサバスカン族の集落は小さい、州政府が造ったという民家で二十戸程度。住民の数なら百人に満たない。しかもそこには何故か混血も多く、アルコール中毒に侵された男達の姿が特に目立つ。

北米全土を覆う時代の趨勢、通称一括してインディアンと呼ばれる少数民族の哀れな終末がそこに見える。

少ない人口に比べて、トックの街には公共施設が比較的揃っている。郵便局に電話局。自然保護局に狩猟管理局。各々規模は小さく、職員の数も少ないが、公共施設が存在する街という点で、特別な地位を占める。

だがここに、あつてしかるべきものが欠けている。それが役場と病院だ。私達親子三人はまず、狩猟管理局の片隅に住いを与えてもらった。そこには毎日のように現地の住民が訪れる。狩猟家にブッシュパイロット、公共施設の現地スタッフに諸々の住民。しかも、一旦受付の部屋に入ってくると、すべての人が大声で長話をつづける。

その話し合いの中に下手な英語で私も加わる。

「この街の人口はどのくらいですか？」
すると笑いながら、話が広がる。

「オイ、誰かこの街の人口知ってるか、俺は知らんぞ。そういえば、俺も知らんなあ。」

「そうだ、あの婦人なら知っているかもしれない。あれ、この街唯一の保健婦さんよ。」

「そうだ、そうだ。あそこでは住民のほぼ全員が世話になっているから、カルテが揃っているぞ。」

「あそこしかないか、……。」

後日、時間の合間を見てその保健婦さんを訪ねた。

「あの、特別な意味はないのですが、よろしければこの街の人口数を教えて戴きたいのですが。」

「えっ、住民の数ですか。誰がここに行けと言いました。多分、狩猟局のデューブかな。担当の役所はないのだから、まあいいでしょう。正確とはいいませんが、大体千二百人です。でも、ここにいる人々はいつ来て、いつ去って行くか分かりません。数カ月でいなくなる人や家族もいるんですよ。」

「ああ、そうですか。有難う御座います。」

アラスカを代表する野生の一種にカリブーがいる。野生のトナカイともいわれる彼らは、季節の大きな変化に合わせて、アラスカの大地を毎年大きく移動する。それと、ここに毎年移って来る一般の人々の動きが、ともに似通っているのだろう。定住を旨とする日本人の私には、一寸理解し難い話のよ

うだ。

そんなトックで私達のオオカミ探しも始まる。最初は狩猟局スタッフや現地のブッシュパイロットへの聞き取り。次は、そこから現実に利用可能な情報を選び、あちらこちらに出掛ける。

時期は四月の上旬、トックから伸びる国道の除雪はある程度期待出来る。毎朝のように、数十キロまず車を走らせる。車を降りると辺り一帯は無人の雪原。親子二人大きな荷物を担ぎ、次に歩くスキーを使って国道を離れる。そこでオオカミの足跡が発見できれば、その足跡を辿ってどんだん奥地へ進んで行く。

途中で日が暮れば、キャンプの準備を始める。気温は零下三十度から四十度。周囲の枯れ枝を集めて焚火をしても、身体は一向に暖まらない。

ふと、空を見上げていた息子の声が聞こえる。

「あれ、オーロラじゃない？」

そう言われて、私も我が身を凍らせながら空を見上げる。

キャンプ地の脇にオオカミ三頭の足跡がつづく。その中の二頭は常に寄り添い、残る一頭の足跡は少し離れた場所を歩いている。多分、その内の一頭は雪面に爪を引きずった跡があるから、出産間近の夫婦と子供一頭の群に違いない。

オオカミの鮮明な足跡を照らして、オーロラが頭上に輝く。決して派手でもないが、間違いなくオーロラは空の一面に輝いている。

期待した生々しいオオカミの姿や痕跡を発見出来る前に季節が移る。

五月、出産期が始まった筈のアラスカの大地から雪と氷の姿が消え始めた。そうすると、国道から外れた地域一帯が湿地帯に変わり始め、歩くスキーは使えない。

スキーを止め、車での移動も大幅に制限する。それに替わって、余り金のかからないエアータクシー、つまり小型のセスナ機をオオカミの探索に使うのだ。

五月二十日、セスナ機を離れてキャンプを始めた私達親子三人の前に、現地でマンスフィールと呼ばれる湖がある。湖と言っても、実際は濁った水の大きな沼という感じがする。ただし、湖一帯には大小の沼が数多くの散在する。

ある日、ブッシュの先に見えた一つのそうした沼の畔に出た。そして、あの灰色オオカミに出会ったのだ。

余り大きいと言えない沼の対岸、約八十メートル。水面に近い藪の中から一頭のオオカミが姿を見せる。それがアラスカで見ることが出来た初めてのオオカミ。

感動に心臓が止まる。恐怖はやはり感じない。ただ、ただ、感謝と感動の

想いが胸に広がる。

(十二) 家族七人のアラスカ

親子三人がアラスカに出掛けた翌年、今度は一家全員七名でアラスカに行くことになった。資金の合計は一千万、これには借金の山が後に残る。

我家は長年、数多くの動物や鳥と人間の共同生活がつづいた。例えば次女は幼い時、カニクイザルの子供とベビーベットの一緒だった。長男の場合は出産直後の様子を身近に見ながら、アイヌ犬の子供達と一緒に育った。

三女と次男は生まれたばかりの北極キツネ八頭の子育てにも参加していた。とすれば、そのすべてが父親の仕事の延長上にあつた訳だから、父親の晴れ舞台上に家族全員が参加することを拒否する理由はなかつた。ただ、家族の中で問題がないにしても、社会的な問題は別にある。

大学浪人の次女はまだいい。問題は長男以下の子供達だ。昭和六二年のその年二月、中学三年を間近に控えた長男が、学校で生徒会の会長に選ばれてしまった。しかし、その長男こそ、私のオオカミ研究ではかけがいのない助人。その息子を日本に置いて、残りの家族だけでアラスカ行は考えられない。仕方なく、新学期直前の中学に出掛け、なんとか校長や教頭の説得に掛かる。しかしすぐ、ハイそうですか、という返事にはならない。

断片的な説得、そして長い沈黙。さすがにこの問題の難しさに頭が痛い。そんな中で苦々しい教頭の声が聞こえる。

「誠に常識外れの申し出です。それでは子供達の生徒会が成り立ちません。しかし昨年、親御さん三名のアラスカ行にあれだけマスコミが礼賛した経緯もあります。校長、どうでしょう。ここは私達が生徒会を説得し、なんとかお父さんの希望に応えようではありませんか。」

すると、やはり渋い顔をしながら、校長もその言葉に同調の意志を現す。
―助かった!―

そう思つて胸を撫で下ろすのは私一人。校長室にいる他の二人は顔を引きつらせたまま床や窓の外を見ている。

「失礼しました。有難うございます。」

私は後ろを見ずに、その部屋を後にする。

次は次女と次男が通う小学校。こちらは比較的簡単だった。校長室で中学校と同じ話をする、二人の管理者から好意的な返事が聞かされる。

「そうですね。お子さん達に危険はないでしょうか。ご一家でアラスカですか。見当も付きませんが、素晴らしいことのようなので、どうか無事にお帰り下さい。」

笑顔を見せながらそう言つてくれたのは校長だったか教頭だったか、記憶

にない。でもその返答は大変結構。気持ちよく頭を下げ、少々の雑談をして帰宅の道を急ぐ。

出発はやはりアラスカの冬がつづく三月末、帰国はアラスカの真夏に当たる七月後半。とすれば、家族七人分の装備も結構な量になる。

まずは七台の歩くスキー。これは軽くても長いから、荷物の作り方に苦勞する。次は全員の服装。アラスカの冬と春と夏に備えるとすると、全体の体積がそこで問題になる。

そんなすべての準備が整った三月初旬、私は妻に注意した。

「日本から食品を持ち込むと税関が煩い。絶対止めるように、アンカレッジの空港で追い返されたら、すべては水の泡に終わってしまう。」

妻は勿論、私の言葉に反論しない。私もそんなことを妻がする筈もないと思ひ直し、後は黙って出発の日を迎える。

アラスカ行の日航機にどれだけの重さの荷物を持ち込んだのか、覚えがない。ただ、その総数が合計で二九個の多さになったのを覚えている。

三月末のある日、私達家族七人はようやくやくアンカレッジの空港に到着。荷物を手当たり次第運んで、税関の前に立つ。

そこで女性のおばさん係員にいつも通りの質問受ける。

「不法な持込はありませんか？」

「はい、絶対そんなことはありません。」

「では、荷物を開いて調べます。」

「どうぞ。」

その時、私はまったく心配していない。妻には札幌の自宅で言っている。他の子供達だって心配ない。しかし、しかし、………！

女性の税関吏が妻の荷物を開き始めたとき、何故か妻の顔に歪みがる。

「これはなんですか？」

「えっ、………」

目の前に見えるのは味の素の瓶と乾いた海苔の束。下手な英語は頭から離れ、日本語だって口に出せない。ひたすら沈黙、妻を見ながら苦悩に陥る。

とその時、税関吏の天使のような言葉が再び聞こえる。

「まあ、いいでしょう。ご家族全員一緒ですか？」

「ハイ、そうです。」

「では貴方を除く家族の方は何カ月滞在を希望します。」

「三カ月でお願いします。」

「いいでしょう、じゃ、六カ月間の滞在許可を出しましょう。ただし、貴男だけは三カ月にしておきます。」

「これは一体、………」

どこかに不満も残るが、黙ってその言葉に従う。

あの広大なアラスカで日本人の家族が一緒に旅をつづけると、次から次に事件が起こる。そこで今は、その大部分を割愛して、オオカミの世界だけに話をまとめる。

我々人間と同じように、オオカミもまた一頭毎に個性がある。だから、一群を率いるリーダーの性格や性質によって、人間との付き合い方も変わってくる。

オオカミには他方、大きなテリトリーを抱え、複数の場所に産室を持つという性質があり、大自然を常に動いて暮らすという習性も抱えている。その結果、昨年出会ったオオカミが今年も同じ場所で見えたと保証はどこにもない。ただし、このことを正確に知り得たのは、後日の話である。

一年前、マンスフィールドの湖畔で、私達親子三人を素直に受け入れてくれた牝のオオカミがいた。それを頼りに、ベースキャンプ地のトックに着いて間もなく、一番安い二人乗りのセスナ機で湖畔に向かう。だが、予定したところにオオカミの姿はなかった。

その頃、タナクロスというアサバスカン族の集落の脇に一人のブッシュパイロットがいた。彼の名前はR・ウブロー。年齢は推定三五歳。両親ともアラスカの学校の先生だったという彼の印象は物静かで温厚な紳士。荒くれた者の多いブッシュパイロットの世界で、唯一人孤高を保つような男に見える。彼は自分で整備に関する知識と修理能力に優れ、自宅の脇に専用の飛行場と、セスナ機と最新型の光り輝くヘリコプターを一台持っている。本人の言葉を借りれば、セスナ機とヘリコプターは各々使い道が違う。セスナ機は手軽で安い。どこへ行くのも簡単に出来る。しかし反面、狭い空間や湿地帯に直接降りることが出来ない。

ヘリコプターはその弱点を補ってくれる。ただし、維持費が極端に高く、その爆音が地上の動物を蹴散らしてしまう。

「だから、二台共手放せないのさ。」
とロンが笑顔で教えてくれる。

そんなロンと親しく話合う内に、彼の隠れた素性が見えて来る。こんな僻地の中の僻地に一人で暮らしながら、彼も兄弟と一緒に大学を出ている。趣味は二台の機材整備と、人間の臭いのしない大自然の中で静かに読書すること。そんな彼がひっそり微笑みながら口を開く。

「学校に通う二人の娘と妻は、今カナダのモントリオールに住んでいる。」
その言葉にイギリス人の博物学者の姿が重なる。

トックの狩猟管理局には多くの情報が雪崩れ込む。

「今、街の中をグリズリーがあるいている。」
というのあれば、

「ニューメキシコからすぐアラスカの狩猟に出掛けたい。情報が欲しい。」
といった要請が真夜中でもやってくる。だから、地元一体からカナダ国境にかけてのオオカミ情報も次々と集まってくる。

その中の信頼できそうな話に沿って、私はロンとセスナ機を飛ばす。しかし、それを五回、六回とつづけても、オオカミの姿は上空からも見当たらない。

間もなく焦りに襲われ、苦渋の顔が隠せない。そんな時、私の耳にそつと口を寄せ、ロンが思わぬことを教えてくれる。

「鈴木さん、どうやら今年、マンスフィールドは諦めた方がいい。その代り、あそこから東のカナダ国境に近い場所で一群のオオカミが今年、子育て始めているらしい。どう、行ってみるか？」

それは聞き捨てならない。返事の替わりに、ロンの片腕をとってセスナ機に向かう。

地元でそこはモスキート・フラッツ（蚊の大地）と呼ぶらしい。トックから北東に約百キロ、その蚊の大地の北西端に名前のないピングス（窪地）が一つある。ロンの言葉を借りれば、そのピングス付近がどうも怪しいという。セスナ機は湿地帯のモスキート・フラッツの上空を飛び越え、右に旋回して森林地帯に入る。スプールの木々が疎らに生える森林地帯。その上を高度三百メートルの低空でロンのセスナ機が飛びつづける。

経過した時間は分からない。空に太陽があるせい、視界良好。ヘラジカも時折見える、カリブーの小さな群れも目に入る。と、その直後、スプールの森林の陰にロンが一頭のオオカミを見つける。

「鈴木さん、あそこ、……………」

その時すでに、私の眼もそのオオカミの姿を捉えている。時間わずか一瞬、一秒か二秒の間にセスナ機は一旦、そこから離れる。

「戻るかい？」

「勿論。」

その簡単な言葉につづいて、私の直観が語る言葉を相手に伝える。

「ロン、あれば牝だ。今さつき、自分の仔に母乳を与え終わって、あそこで一息付いていたような気がするよ。」

「えっ、どうしてそれが分かる。確かにあれは牝だけれど、どうしてそこまで分かるの？」

「ただの直観、考えてから頭に浮かんだ話じゃないのさ。」

「だって、貴方は国中にオオカミのいない日本人だろう？」

「その通り、でも自分の見方に今は自信があるんだ。」

「そう、……。」

取り急ぎトックの狩猟局に戻ると、私より先にロンが話し始める。その横顔に、興奮の色が隠せないようだ。

ロンの相手は狩猟局員が二人と自然保護局から無駄話に来ていた男が一人。ロンの話が終わると、狩猟局の現地管理者・ケリーハウスが大きな声で叫び出す。

「鈴木さん、おめでとう。それにしても、ロンの話には驚かされたよ。」

「まあ、私のような人間だから、自分の直観を余りえげれないよ。でも、今年最後のチャンスと違って、明日から現地に飛び込もうと思っているけど、いいなか？」

「オフコース、貴方の思い通りに。」

話は即決。その瞬間、短い空白の中で、頭が動く。

―何故、あんな話を口にしたのか。その背景に何があるのか？―

頭の中は急速に走り始める。札幌の自宅で繰り返した犬達の出産と育児場面。三年間の無駄足の間にならぬ北半島で培われた野生の感覚。その二つの記憶が微妙に絡み合い、今一つになって私固有の直観をその時働かせたのではないか。その主人公は私という人間であり、かつもう一つ別の人間のようでもある。

翌日の正午前、タナクロスの飛行場をロンのヘリコプターで飛び出し、他の人々に囲まれながら不安を隠せない妻を残して、勇躍あのピンゴスに向かう。

スプールの森林に囲まれたピンゴスに、適当な広場は見当たらない。それでも、ロンは自分のヘリコプターを巧妙に操りながら着陸地点を探す。

そのロンのヘリコプターが私をオオカミの巣の近くに降ろして間もなく、空の彼方に消えて行く。それからわずか三十分、自前のテントを作り終えた私の耳に、近くの森林を揺るがすような、オオカミの叫びが聞こえる。

太く、長く、そのくせ嘆きや悲しみを湛えたような一頭のオオカミ。姿は直接見えない。しかし、私のテントから五十メートル程度しか離れていないようだ。

時期は六月、アラスカに夜は来ない。

(十四) オオカミの幼い子供達

ロンのヘリコプターから降りた私が小型のテントを張っている間に、オオカミの子供達すぐ近くの巣穴(デン)に逃げ込んでいた。その巣穴までは私のテントから三十メートル。しかしすぐ、気が焦ってそこまでノコノコと出掛けることは是非避けなければいけない。

時間が経過する。周囲の明るさこそ変わらないが、空気の中に夕暮れを感じず。すると近くでオオカミの怒号のような遠吠えが鳴り響く。直観的に、このピンゴスで子育て中の牝オオカミに違いない。

なかなかオオカミの遠吠えは止まらない。高い木々に囲まれているせいかな、その声の反響が辺りに轟く。その声の中に母オオカミの悲しみが籠る。

さらししばらく時が流れる。やがて、近くでつづいたオオカミの叫びが途切れる。そこで生まれた静寂の向こうから、かすかな動物の声が聞こえる。一頭ではない。数頭のオオカミが啼き交わすコーラスのようだ。低く高く、重くせつなく。

睡眠三時間、ピンゴス三日目の朝を迎える。寒くはない。辺りで小鳥の声が響き渡る。小鳥の姿は見えない。余り大きいといえないピンゴスの中も、視界を遮らない程度の低い木はある。しかし、そこを取り巻く土手の上には樹高十五から二十メートルの高木が並ぶ。

午後、オオカミの子供達が遂に巣穴（デン）から姿を現す。数えて三頭。サイズと毛並の様子から、生後三週の後半から四週の初めに見える。

こちらに気付く様子もないので、一人分の小さなテントの中から顔だけ出して観察をつづける。ただ何故か、予想していた感動や感激の瞬間がやってこない。そのことに不可解感が伴う。

目の前三メートル、巣穴に出入りする三頭の仔オオカミ。どうやら元気がないようだ。一つ一つの動きに怯えが見える。それに、腰が少し落ち気味だし、毛並にも逆立ちの様子が窺える。

その仔オオカミが鼻先を空に向けて泣き出す。哀れな悲鳴にも聞こえる。やがて、そんな仔オオカミの叫びに応じて、またあの大声が近くから呼び返す。声そのものは牡オオカミを予想させるが、その声に隠された悲しみの響きが、オオカミの母親だと言っている。

泣きつづける仔オオカミは巣穴の近くから動けない。そこから百メートルもない林の中にいる母親の方も、やはり子供達の傍まで近付かない。

ふと頭の中に疑問が浮かぶ。仔オオカミが間違いなく飢えている。母親もその点を十分に承知している筈だ。何故だ、何故自分の子供達を救ってやらないのか。相手は目の前にいるようなものなのに。

私は愚かだった。自分の存在がその原因のすべてで、障害になっていることにしばらく気付かなかったのだ。

まだ十分明るい夕方、突然近くで母親の野太い大声が鳴り響く。巣穴の辺りに仔オオカミの姿は見えない。巣穴に潜り込んでいるのだろう。

よく聞き耳を立てると、母親の叫び声にいつもと違う響きがある。ただ叫ぶというのでなく、誰かとなき交わす、といった感じが読み取れる。そう思い、自分の感覚すべてを遥か彼方に向ける。

聞こえる。かすかだが、遠く西方向の平原辺りから複数のオオカミの叫びが聞こえる。その声に、傍にいるオオカミが答えているのだ。

これもオオカミのコーラスの一種というのだろうか。見事な掛け合いと、絶妙な調和の世界。声の主達の姿はまったく見えないのに、あたかも大きな劇場でロシア民謡の伝統的なコーラスを聞いているような錯覚に陥る。

美しいと思う。このピンゴスに来て湧き上がる初めて感動の瞬間。私の人生で頂点となりそうな至福の一瞬。思わず知らず、首を垂れる。だが、時間の経過に伴い、新たな悔恨に近い思いが湧き上がる。

彼等は今まで順調にして平和な子育てをつづけていた筈だ。なのに、私という人間の勝手な侵入がその平和で大切な時間を破壊している。どうする。どうしたらこの事態を打開出来る、………？

(十四) 仔オオカミへの貧しい給餌

考え始めて三時間、目前の事態を打開する完全解が頭に浮かぶ。

—自分がここから立ち去ってしまえばいい。—

だが、四方八方、大平原の広がるアラスカの大地で、一体どの方向に移つたらいいのか分からない。いや、それは嘘だ。相手に通用しない独善的な自己弁護に過ぎない言葉だ。

子育て中のオオカミにとって、私という人間がどこに行こうと、何一つ問題は無い。そこで問題になるのは、私自身が無事生き残ろうとする勝手な意図にそぐわない、という身勝手な話に他ならない。

—このまま相手の落ち着くのを待つて、念願のオオカミ観察をつづけたい。だが、お前はそれでいいのか。野生動物研究の学者として、真の良心まで捨て去っていいのか？—

答は明白、議論の余地すら残っていない。しかし、このピンゴスから抜け出した後が私にとって問題なのだ。GPSを使える時代ではない。手元にソーラー製の簡単な無線機こそあるが、トックの狩猟局でその使用を禁止されている。

—、今は米ソの緊張状態にあるから、アメリカ全土が超感度の無線監視システムで守られている。特にソ連を標的としている今、アラスカのどこかで発信源不明の無線機が行われると、米軍全体に緊張が走る。だから、貴方の無線機は使用禁止にするよ。—

その言葉は理解出来る。反論も出来ない。しかし、道一つなく、全域無番地の世界で、一体どうしたらいいのか。ロンがやがてこのピンゴスまで救出に来たとしても、私がここから動いていたとしたら、どうやって発見出来る

というのか。弱い人間故に考え、悩み、苦しむ。そして最後に、一つの妥協策を頭に浮かべる。

—私の保存食を使ってしばらく子供達に給餌しよう！—

子供達のいる巣穴のすぐ傍にいる筈の母オオカミはやはり、姿を現さない。朝に夕に二つの場所に別れてオオカミ一家のなき交わす絶妙なコーラスが聞こえるから、母親がそぶ傍にいることに間違いはない。それでもやはり、子供達の厳しい飢えがつづく。

このピンゴスに来るとき、私はどうしてもオオカミ一家全員の姿を間近に見たかった。しかしそのために巣穴の近い場所に観察の拠点（キャンプ）を置くとなると、幾つか考慮すべきことが当然ある。

まず、そこで火は使えない。匂いの強い食物、つまり肉や魚もそのままでは持ち込めない。アルコールもどうやら駄目らしい。となると、一番厄介なのは手持ちの食糧となる。

狩猟局の連中と事前に話し合い、すべての生もの、もしくは半生であつても、肉と魚は持ち込まない。イーストの効いたパン類も止めよう。ライターもマツチも置いていこう。時期が時期だから、携帯用の照明も必要ない。勿論、酒類は元々飲まないから、手荷物に含まれない。

そこで結局、ピンゴスに持ち込む荷物は極端に減った。食料はというと、無味乾燥なセーラー印の乾パンに、一缶百CCのソーセイジ。同じく百CCのトマトジュースの缶に、最後は飲み水。それらを二週間分まとめてピンゴスに持ち込む。

さて、そんな程度の食材で、飢えの激しい三頭の仔オオカミを救えるのか。食器もなければ、他は何もないのだから。

幸い、己の餓死を怯えるように、三頭の仔オオカミは私のテントにやってくる。少し足元を揺らしながら、私という人間の存在に怯える気配はまったく見せない。その姿にふと、長年自宅で繰り返し育てたアイヌ犬の仔犬の姿が重なる。愛しさが込み上げる。

—助けなければ、・・・・・・・・—

まず、段ボールの箱から乾パンを取り出す。それを一枚、一枚崩し、飲み水を加える。そこに小さな缶入りソーセイジを一缶分加え、丁寧に混ぜ合わせる。

臭いがするのか、オオカミの仔の一头は地面に座り込んだ私の膝に両手を掛ける。目と鼻の先にオオカミの仔の姿が。一瞬、長年の宿願が果たされたような錯覚にも囚われる。

仔オオカミ達は期待通り、その手製離乳食に飛び付いてくる。

—成功だ！—

—と思う反面、一分も経たずに消えてしまう離乳食を眺めながら、これから

どうするか、思い悩む。

母乳や母親からもらう柔らかい生肉を考えると、乾パンにソーセイジと水だけの食事は栄養面で問題がある。また、どう考えても、絶対量の問題がアキレス腱になる。

まずそこで考えられるのは私が自分の食事を一切止めることだ。しかしそれでも、手持ちの食糧の限界が目には余る。

手持ちの食糧の中で乾パンだけは少し余分にある。しかし問題は、小さな缶入りのソーセイジ。これは今、一食に一缶、一日三食で二週間分の内、すでに四日分が私の胃の中に消えてしまった。となれば、仔オオカミにも一日三回食事させると、後十日ですべてが尽きる。まさか、トマトジュースがその代用になると思えない。

日を追うごとに、仔オオカミの餓死の危険が迫る。私の絶食期間もやがて一週間を迎える。折に触れて意識が途絶える。頭の回転も時々止まる。

―打つ手がない、・・・・・・・・。―
自分の思いが言葉になって耳に届く。

多分、そうして十日目を迎えた日、人声や人工的な刺激に飢えていた私の耳に、セスナ機の軽快な爆音が聞こえる。方向は西から東、そう思った途端、脇のテントに飛び込んで無線機のスイッチをONにする。

「HELP ME、HELP ME。」

セスナ機の操縦者も同乗者も分からない。また、相手の無線機がONなのかどうか分からない。しかし、仔オオカミの目前に迫る餓死は防げるものなら防ぎたい。

手元の受信機に雑音が聞こえる。相手が話しているのかどうか、聞き取れない。それでも、上空を二、三度往復してくれたセスナ機は最後に姿を消すとき、両翼を左右に振って飛び去って行った。

―これで助けられる！―

そう思ったとき、私の意識もどこかに消えた。

(十五) 大自然界から受取った啓示

気が付くと、頭上に見たことのないヘリコプターが旋回している。それがやがて、近くの空き地に降りてくる。助手席から一人の男が顔を出す。その顔に見覚えがある。狩猟局の職員で、地元では優秀なハンターで知られる男だ。

「グレンガード、餓死寸前の仔オオカミを救いたい。狩猟局に戻って、生肉をここに持ち帰りたい。頼む、・・・・・・・・。」

何故、ここにロンも彼のヘリコプターも来ないのか、ふと頭の片隅を過る。

しかし今は、そんなことも問題にならない。

結果からいうと、狩猟局で集めてくれたマスクラット（麝香ネズミの一種）の生肉は折り返しピゴスまで持ち帰ることが出来た。しかし、その肉を食う筈の仔オオカミ一頭はすでに冷たい死体になっている。

同じネズミはネズミでも、北の沼地に生息するマスクラットは体重が一、二キロ。肉は柔らかく、脂肪が溢れる。アラスカの白人は余り食べないが、アサバスカンの人々は喜んで食べる。後日、別のオオカミの巣穴を調べたとき、そこに親が運び込んだマスクラットが幾つか見受けられた。

足元で、飢えていた仔オオカミがそのマスクラットに飛び付く。しかし、私の胸に抱かれた残る一頭の仔オオカミの身体から柔らかさが消え、小さな硬直した死体となって私を苛む。

―御免、すまない。―

他に言葉が見当たらない。

フィールドノートは余白が目立つ。それも今は、気にならない。

―これからどうすべきか？―

そのことだけで頭が痛い。

時間が流れる。小鳥の声もまた聞こえる。シマフクロウが近くの木の上に巨大な姿を見せる。少し離れた平原には小柄なシロフクロウの姿も見える。グリズリーは別にしても、カリブー（野生のトナカイ）やムース（ヘラジカ）がある時は単独で、またある時は小さな集団で現れる。でも今は、その情景すら、なんの興味や関心が湧いてこない。

また時間が流れる。本人の意志に反して、短い時間のうたた寝を繰り返す。もう考える力が殆ど消え去り、生き残った仔オオカミに肉を与えるだけのロボットのようだ。

何度目かのコーラスを聞いていた時、ふとどこからか人間の言葉が聞こえる。

―今更、我々オオカミを研究してどうなる。止めてくれ。ここまで我々オオカミを追い込み、世界中から追いつづけたことを思い出せ。もう止める。オオカミを守るなんて考えるな。余計なことだ。それは一部の人間の心を救うだけで、我々オオカミには関係ない。百匹、千匹の仲間を殺される傍ら、わずか一頭の仲間が救われたところで、それは人間の自慰行為に過ぎない。人間の文明なんて愚かなものだ。やがて絶滅に向かうのはお前達人間だろう。帰れ、そしてこの仔達を解放しろ。―

それが自分自身の声なのか、それともオオカミ達の神、あるいは大自然の神様なのか分からない。しかし、その声の意図するところはよく分かる。

「ここはすぐ離れよう。そしてもう、オオカミの研究自体を放棄しよう。——
ようやく狩猟局に戻ると、髭面の疲れ果てた男を見て、妻や長女が泣いて
いる。」

(十六) オオカミ研究の権威・ミーチ博士

ベースキャンプに戻り、しばらく沈黙と衰弱の日々を送る。その間、一寸
気分のいい時に狩猟局を訪ね、責任者のケリーハウスと言葉を交わす。

「ケリーハウス、私は君に謝らねばならない。」

「なんだい、急に改まって。身体は少し回復したかい？」

「まあ、身体の方はともかく、私はあのピンゴスで仔オオカミを一頭殺して
しまった。」

「それはどういうこと？」

「つまりね、私があそこに入り込んだために、母親が授乳を止めてしまっ
たんだ。そして結局、どうにか二頭は生き残ったが、残る一頭だけ餓死させて
しまったのさ。」

「いや、その話はグレンガードからすでに聞いているよ。貴方の責任じゃな
いよ。」

「それはどうして、……..?」

「今まで言わなくて悪かったけれど、実は今年の二月から三月の初旬に掛け
て、我々がすべての群を追い掛け、ヘリコプターからの射撃で各群れから一
頭づつ殺していたんだ。」

「えっ、何故そんなことに、……..?」

「実はね、アラスカ州知事からそういう命令が下っていたのさ。外国からの
狩猟家をムースとかカリブーといった大物狩りで喜ばそうとしたらしいよ。
その点ではオオカミが天敵だからね。」

「……..」

そこで次の言葉を失う。怒りはない。ただ、驚きだけがそこにある。適当
な返事も挨拶もなく、無言のまま肩を落としてその場を去る。

数日後、そのケリーハウスから呼び出しが掛かる。まだ衰弱を身体に残し
たまま、狩猟局に出掛ける。そこに、見知らぬ大柄な中年の男がいて、私の
到着を待っていたようだ。

「鈴木さん、この人がアメリカ全土のオオカミ研究を総括しているミーチ博
士。貴方も名前だけは知っている筈だよ。」

「YES、OF COURSE!」

「やあ、始めまして、私がミーチです。」

身体は巖ついが、声は柔らかい。それに、何の屈託もなさそうなおその笑顔

が素晴らしい。しかし、彼が何故、こんな僻地のアラスカにいるのか、その訳が分からない。

「どうしてここに、…….?」

「いやね、博士は今日、アメリカ本土から自分のセスナ機でここに来たんだ。」
そう口挟んだのはケリーハウス。

「じゃ、私に特別な用事でも、…….?」

「YES、よろしければ、貴方のオオカミ研究の計画と具体的な内容を教えてください。」

「分かりました。」

そこでわずかな時間をもらい、頭の中を整理する。

下手な英語だから、どの位の時間が掛かったか記憶にない。それでも、私が語り終わった時、博士の顔にもう一度笑顔が覗き、満足そうな様子をして
いる。

「分かりました。」

その言葉に合わせて、博士の部厚い右手が差し出される。

「良かった、……。」

と思った瞬間、私は思わぬ言葉を口走っている。

「ミーチ博士、我儘をもう一言いわせてください。あのペンゴスをそのまま
にしておく、残りの二頭も衰弱したまま死ぬことも考えられます。それは
あの群れにとって、途轍もない打撃になると思います。これは相談ですが、
別の群から同じ年頃の仔オオカミを移し、その打撃を和らげることは出来な
いでしょうか。」

「いいでしょう。やってみてください。私の権限で許可します。ケリーハウ
ス、鈴木さんの移植計画を側面から援助出来るね。」

「勿論です。」

本人の期待を通り越して、話は突然決まった。その偶然のチャンスこそ、
オオカミを知りたいと念願していた私という人間への、最大にして最高の報
酬を受け取る、またとない機会になる。

数日後、わたしの手に二頭の仔オオカミがいた。時期が少しずれたせいか、
その二頭は身体も大きく、体重も両腕に予想以上の重みを感じられた。

それから二週間、新たな二頭の仔オオカミは私達家族と家の中で一緒に暮
らした。その間、仔オオカミは人間の大人ではなく、まだ小学生だった次女
と次男に終日しがみついていた。

やがて、ロンの飛行場で家族と仔オオカミの別れの時を迎えた。ロンと私
は例のペンゴスにヘリコプターで向かい、そこで沢山の生肉と共に、巣穴の
脇に仔オオカミを置き去りにする計画だった。

仔オオカミ二頭を私に手渡す瞬間、妻が大粒の涙を流して泣き出した。

「大丈夫？」

「大丈夫だ。ミーチ博士もこの計画を認めているから。」

「でも、心配だわ。」

本場のところ、私自身にも不安はある。失敗した時の悲惨な結果を考えると、取り返しのつかない最悪の罪を重ねることになるからだ。

しかし今、私は野生動物研究者として、それなりの自信がある。

―間違いが起こったら大学を止め、研究者も止める。―

オオカミにとつて、そこにどれだけの意味があるのか分らない。しかし、そんなことでしか、あのピンゴスの群れに報いる方法はない、と私は自分で自分に言い聞かせる。

やがて七月、家族全員でアラスカを離れるときが来た。ロンからは、

「あの二頭は無事に育っているよ。」

と電話をもらっている。

ピンゴスの群と二頭の仔オオカミ。そして気高く孤高を保ちながらアラスカの奥地に生きる男、ロン。

札幌に戻った家族も私も、彼等を一生忘れることはない。

(十七) オオカミ研究の代償

昭和六二年七月、家族が揃って帰国。五人の子供は各々元の生活に戻る。

同八月、同行取材していたNHKの海外取材班の制作した番組がNHKスペシャルとして放映される。が、その内容を自宅のテレビで見て、一瞬息をのむ。

その番組にオオカミ達の姿も、またオオカミの群（育児期間）の様子も一切描かれていない。それもその筈、東京の渋谷から来た取材班が、肝心の時、オオカミの群に近付き過ぎると危険だから、その部分の取材は回避している、と海外取材担当の部長から言われています。―

まあ、その部長の話はいい。総括する責任者の言葉として、良識ある発言ともいえる。しかし、肝心の映像がないからといって、私があるいは私の家族が一切オオカミと接触できなかつた、という件は許せない。

即座に東京へ向かい、渋谷のNHK本部でその部長と会う。すると利口な部長は素直にこちら意見を受け入れ、

―その点はいつも海外取材の番組制作で問題になり、指摘されることです。そこで妥協案として一つ提案があります。NHKの出版部からドキュメンタリー作品を出版してください。その中で真実の話をすべて書き込んでください。手配はこちらで致します。どうでしょうか、……?」―

それでも、こちらには不満が残る。しかし、過ぎ去った時間の針を再び元

に戻すことも出来ない。

「分かりました。そうさせてもらいます。」

札幌に戻り、早速執筆の準備に入る、がそこで、あることに気付いた。私が本に書く世界は常に高い緊張の伴う日々。しかし、こうして日本に戻った世界は安心・安全・清潔が常に保障された世界。本を書くという本人も、否応なくそんな日々を置くことになる。

すると、アラスカを生々しく描写することが出来ない。書き始めた文章の一つ、一つに苛立ちが募る。

悩む、苦しむ。そして最後に、打開案をどうにか見つけ出す。

—アラスカの日に繋がる緊張感を一部なりと取り戻そうとするなら、自身で日々、厳しい緊張感を作り出せばいいのだ。—

その解決案に基づき、私は早朝と夕方、近所の豊平川岸を、一回五キロにして全力で走る。そうすると、走り終わる毎に自分の汗が全身に溢れ、一旦異常に上がってしまった呼吸もなかなか戻らない。馬鹿な話と思うが、それでも自らを日々苦痛に追い込むことで、ある種の緊張感が維持出来る。

書き始めたのが同年九月初旬、終わったのが十二月末のクリスマス。その最後の原稿をNHK出版部の担当編集者に直接手渡し、そのままNHKラジオの生番組に出演する。

話題は、「私の子育て」。時間は一時間で、一人の中年の女性アナグサーとの対談形式。その時、執筆に疲れ果てていた私は気負いもなく、とても素直に相手の質問に答えていた記憶がある。

正月明けの二週間後、その本が手元に送られてきた。しかしもう、私には自分の書いた本を開くことも、読むことすらできなかった。

頭と身体が鉛のように重い。それに心臓から不定期的な痛みがやって来る。大学を休み、自宅のソファで終日過ごす。しかし、症状の改善はみられない。

友人の伝手を頼り、大病院の循環器内科に出向く。途中、車の運転が辛い。手足が思うように動かない。

大病院の通例として、検査に次ぐ検査が始まる。しかし、そこで判明したことは限られる。脈拍一分間四二、最高血圧六十、呼吸数一分間三回、血液検査異常なし。原因不明、即決診断不能。帰宅、それから長い療養生活が始まる。

苦悩とは言わない。ただ、重苦しい苦痛に満ちた日々づく。周囲の家族も私の異様な姿に悩み、苦しんでいる。しかし、家族のため、そして自分自身のために出来ることなど何も無い。

それから約四年、五十代に入った私にそんな日々がつづいた。その間にぼんやり頭に浮かんだことがある。

—これは自分が敢えて挑んだオオカミ研究の報い。幾ら苦しく厳しくても、あの代償として受け入れるべきなのだ。—

一九九四年二月、そんな私にようやく診断が下った。「特異性狭心症」、それが私の病名だった。と同時に、知人の医者から特効薬を渡された。元々、リュウマチ用に使ったという薬だ。それから一気に症状が改善され、私はようやく立ち直りの機会に再び恵まれた。

症状が最悪の時、心臓は一分間で二十数回まで落ち込んだ。そうになると、心臓の一拍、一拍に鋭い痛みが伴った。しかしもう、そんな日々も過去の話。過去四年間の自分がまったく別の自分へと変わりつづける。

同年三月、大学に戻った研究室に一本の電話が掛かってきた。それがまた、私の研究者人生に新たな道を拓いた。本人が好むと好まざるに拘らず、その道が私という人間を新たな世界に導いて行つた。

(十八) 一九九四年カムチャッカ

病み上がりの身体にまだ鉛の鎧がまとわりつく。人並みに歩けても、走ることは出来ない。頭も動くことは動くが、適当な緊張感に欠けている。

電話の相手は京都大学の和田さんだった。彼の電話はいつも簡単、三月の末に札幌で新たな研究会を開くから、是非出席願いますということだ。こちらの返事も聞かず、電話は切れる。

その研究会の当日、指定された場所に向くと、和田さんの他に、見知らぬ若い顔が揃っている。

「やあ鈴木さん、待ってました。それじゃ早々、今日の打ち合わせ会議を始めます。……。」

無駄を一切省いた彼の話をまとめるとこうなる。

米ロでつづいていた海洋哺乳動物(クジラ・ラッコまで)の研究プロジェクトに参加することになった。手元の資金もある。ただ、現地に出掛ける人材が不足している。テーマは強制しないが、希望者があれば申し出て欲しい。

和田さんの簡単な話が終わると一人、二人と手を挙げる者が出てくる。しかしどうやっても、和田さんの頭にある数が揃わない。それに焦れたのか、和田さんまた口を開く。

「では鈴木さん、貴方の学生で参加する人はいないでしょうか？」

それは当然といえば当然の話。少し考えてから素直に、探しましょうと私

は答える。

「大学院の修士課程でまだ論文のテーマが決まっていない者が二人いますから、なんとか一人は大丈夫でしょう。」

数日後、大学の研究室にその二人を順次呼び出す。

「どうだろう。こんないい話がある。君、出掛けてみないか。絶好のチャンスだと思っけれど、……。」

それまで、私に不安はなかった。少なくとも二人の内では一人はYESというに違いない、と思っていたのだ。だが、こちらの期待は一気に崩れた。

「ペレストロイカに揺れるロシアは危険過ぎます。僕は国内で研究テーマを探します。」

「……？」

説得はできなかった。しかしそれでは、和田さんとの約束が果たせない。少し時間を置き、改めてこちらから彼に電話を掛ける。

「和田さん御免、学生達に拒否されてしまった。」

「えっ、それじゃ、日本側の責任者を務める僕の立場がありません。」

「そりゃそうですよね。困りましたね、それは、……。」

「じゃ、鈴木さん。責任を取って貴方がカムチャッカに行くというのは？」

「一寸待ってください。」

四年間余りの療養で私の身体はまだ、病み上がりともいえないほどの悪い状態にある。しかも、できればカムチャッカ半島の東三百キロの無人島で、トドの研究プロジェクトの仕事が待っているというような話では、

「冗談も顔だけ、……。」

と私も思う。しかし、ふとその場所を頭の中の世界地図で思い浮かべていると、第二次世界大戦中のアッツ玉砕の史実に思い至る。

―これは無理をしても、自分自身で行くべきか。―

考える。戸惑う。呼吸を止め、それを一気に吐き出す。すべては唯一人の研究室の中、誰も覗いたり耳をそば立てる者がいない。

四月の半ばを過ぎて、私は和田さんに電話でYESと答える。どうやらまた、私の周りで一大騒動がまた起こりそうだ。

五月十五日、札幌から新潟、新潟からハバロフスク、ハバロフスクからカムチャッカの首都・PK（ペテロパブロフスク）という一拍二日の旅に出発。

かつてのソ連は一党独裁で、国家権力の下にある厳格な管理社会。それがブルガチョフからエリチンにトップが替わり、国全体のシステムがペレストロイカの大波に振り回されている。そして私は、その末端の世界にようやく降り立つ。

私を現地で迎えてくれたロシアの人々はみんな、愛すべき人物ばかり。ただ、もう一つのアラスカとでもいふべきカムチャッカは、電機も水道も、集

中暖房もままならない。それに市役所も小学校も、さらに郵便局も警察でさえ、人の姿が見えない。

街中に散在するバザール。その中で堂々と換金に応ずるロシアのマフィア。ポロポロのバス。怪しげな白タク。そんな市街地から、一体どこに飛び出し、何を研究しようというのか。

五月末日、濃霧と強い風の中を、トドの繁殖地として世界的に知られる小さな無人島・メドニーに到着。それから数人のロシア人と約一カ月半のトド研究に従事する。

その一カ月半を含めて、合計百日のカムチャッカ滞在中、語りたいたことは無限にある。実際、公開する予定のなかったロシア日記が手元にある。それはさて置き、その年にカムチャッカを去る時、余りの貧しさに喘ぐ研究仲間、手持ちの装備や機材すべてを残してきた。

ようやく新潟空港に戻った時、私の手に残っていたのは数冊のフィールドノートと未現像のフィルム百本。他には何もなかった。

貧しい食事をしながらメドニーで送った日々、島の南東方向に何度も目を向けた。確かその方向に、日本軍玉砕の島・アッツがある筈だった。

(十九) 一九九五年カムチャッカ

最後は塩と麦粉だけの食事がつづいたベーリング海に浮かぶ無人島・メドニーでの生活。そこから日本に戻った直後、激しいカルチャーショックに見舞われる。

自然条件の如何にかかわらず、常に安全で、すべてが整っている日本。その中で暮らすうちに、無防備な姿に変わってしまった日本人。そこでまた暮らす日々が始まった時、私はひどい吐き気に襲われつづけた。

あの無人島や無政府状態のカムチャッカにいたとき、なんの苦痛や不安を感じなかった自分がある。常に身を引き締め、辺りに注意を払えば、気分よく暮らせたあの日々。貧し過ぎる程貧しい生活をつづけながら、何故ロシア人はあれ程人情に溢れているのか。それに引き換え、日本の社会は何故ここまで非情にして、ひとびとの虚しい日々がつづくのか。否応なく考えさせられ、悩みと苦しみの中に沈み込む。

帰国して一カ月、カムチャッカからメールが届く。

―今年予定していたすべてのプロジェクトが最近になって終わりました。ついでには貴男に来年の参加も期待しているのですが、如何ですか。ご返答お待ちしております。―

カムチャッカのPK空港を離れるとき、すでに私は来年も間違いなく来るよ、と言った覚えがある。だからそのメールは一種の確認と同時に、現場を

離れても、日本人の私との付き合いを絶やしたくない、という意味のメールだと理解した。

勿論、折り返しYESのメールを送った。すると次に、二つの重要な話がメールで送られてきた。

一つは来年の九月、米ロ合同の国際海洋哺乳動物会議がPKで開かれること。そしてもう一つは今回、ロシア側の代表責任者を務めていたブルカノフに、人生の重大事件とも言えそうな予想外の話が起こっている、ということだった。

発信者はブルカノフ本人。彼は当時三七歳のアザラシ研究者。無駄肉のない身体に人を和ませる笑みを浮かべている男。他の研究者と同様に貧しいが、一家四人の主として、また予算が常に不足する研究プロジェクトの現地責任者として、輝きのある人物だった。

「どうしたブルカノフ、話の内容が見えない。もっと具体的に話してくれ。」折り返し、私はそんなメールを打った。するとすぐ、本人からのメールが届いた。

「実は今、大変な話を持ち込まれている。突然、漁業規制局の代表を名乗る連中が自宅に来て、この秋からでも、規制局の局長に就任してくれと言っている。どうしたもんだろう。僕自身は一介の研究者で毎年フィールドに出掛けたい。それに妻のワリーヤも、そんな大変な公職に就くと、私の夫がいなくなる、と言って毎日のように泣いているんだ。鈴木さん、貴方の意見を聞いてみたい。」

あれ、あれ、それは途方もない話だと私も思う。

ロシアの中心はモスコとサンクト。ペテルスブルク。そこから極東ロシアの最東端に浮かぶカムチャッカ半島には主だった産業がない。強いていうなら、日本の北洋漁業船を取り締まりながら、大金の入漁料を毎年受け取る規制局の存在がとて大きい。

そこには六百人の常勤職員とその家族、さらには秋のサケマス漁の解禁期間ともなれば、あと数百人の非常勤職員が加わる大所帯になる。

ブルカノフは常に、沈着冷静。責任感が強く、柔和な顔の底に、強固な意志を隠しているような人間に見える。しかし一体誰がそんな彼の素性を見抜き、下は二十歳から上は六十歳にもなる職員六百人の総指揮者に突然しようとしているのか。分かるようで分からなく、分からないようで分かる話に、私も自然に引き込まれる。

—これはどう答えるべきか、……?—

他人ごとながら、再び悩み、考えを巡らす。彼自身のため、私も知る彼の家族のため、そしてあの極東の地の街中を貧しく、虚しそうに歩いていた多くのカムチャッカ人のために。そして結局、私は一通のメールを送った。

「引き受けなさい。ただし、二年または最大三年という期限付きで。」

九四年の秋、そのメールを出した後で、ブルカノフ自身と彼を常にサポーターとしている義兄サーシャに、札幌から二台の四輪駆動車を船便で送った。日本国内でいえば、ポンコツに近いものだったが、その時期のカムチャツカの街を走る車の余りの酷さを見ると、そんな車でも価値があった。

「どうだ？」

とメール問い合わせると、

「有難う。待っています。」

という返事を事前にもらっていたい。

翌九五年、今年も五月後半に出掛けようと思っていると、ブルカノフから先にメールが来た。

「今年は四月末に一メートルを超す雪が降って、このまま五月末まで雪が残ります。今年は六月中旬にして下さい。」

カムチャツカ半島の中央部に位置するPKの街は、北緯にすると五四度辺りになる。それは日本の北海道からしても、北に千キロ以上の所。だから、単純に考えれば、五月に大雪が降ってもおかしくない。ただ、ブルカノフの言葉の背後に、もう一つ別な意味が隠れているような気もする。

二年にわたる私達のトド研究では、繁殖期にトドが作る集団もしくは社会の生成から最後の集団（社会）解消に至る過程全体を把握することにある。その点でいうなら、去年は繁殖社会の初期段階、つまり生成する瞬間（五月末）から完成に至る時期に焦点を合わせてきた。だから今年九五年は、後半から終盤の社会や集団の解散する姿を克明に捉えることに意味がある。

―婉曲ながら、ブルカノフはそのことを私に伝えようとしているのだ。―
相手がアメリカ人の研究者なら、決してこんなことはしない。直接、ズバリと言ってくる。かつての日本人もこうしたロシア人の姿に似ていたのではなからうか。そして今現在の日本人の若手研究者の場合、ロシア人ではなく、アメリカ人の姿や態度に近いような気がする。

私は九五年のその時、五十代の半ば。父も母も明治半ばの生まれだったから、同じ現代社会に生きていても、古いタイプの日本人を継承しているのだろう。そのせいか、メールの背後に隠されたロシア人ブルカノフの心使いに親しみを覚える。

七月半ば、カムチャツカのPKの街から再びメドニーに向かう。到着直後、島の南東端にあるトドの繁殖地に出掛け、海岸からわずかメートル上の断崖から、動物達の世界を眺める。

気温は十五度余り、風もなく、太陽が燦々と海岸に降り注ぐ。

昨年六月、生れたばかりの子供を踏み散らしながらつづいた牡同士の激しい戦いはもうない。その替わりに、穏やかで平和なトドの世界が狭い海岸

を埋めている。

数えると、体重千キロ近い牡が五、六十頭。乳飲み子を抱える牝が二百頭余り。それに一、二歳から四、五歳程度の小柄な身体のものが三十頭程いるようだ。

全体の数で言えば、今年も去年と変わらない。しかし、全体から浮かび上がる印象はまったく違う。

去年は緊張と興奮が繁殖地全体を包んでいた。しかし、出産から新たな交尾に向かう時期（六月末）を過ぎた今年の場合、戦場が平和な国家に変わっている。その劇的な変化に、私のトドに対するイメージが変わる。

—あの荒々しいトドにも、こんな穏やかな世界があるのだ！—

トドの一部は私の棲む北海道にもやってくる。主な時期は秋の最中から初春。当初は大量のサケを食べ、滞在後半はホッケやスケソウダラを食べているようだ。そこで問題が起こる。

トドは確かに、北の海に君臨する荒々しい動物。一般の漁業者の接近にも、定置網も相手にしない。漁民の頼りにする魚を網を破って追い掛ける。それはしかし、トドの一面。彼等の姿の陰には産まれたばかりで、体重も三十キロに満たない小さな子供が自分の四、五十倍もある牡の背中で遊ぶ世界もあるのだ。

そんなメドニーからPKの街に戻った九月初旬、予告されていた米露海洋動物会議が始まる。期間は一週間、アメリカから十人、ロシアからは三十人余りの研究者が参加している。その直前に問い合わせたところ、

—日本人の参加をこれまで認めたことがない。ただ鈴木さんがどうしてもというなら、これからモスコウのボスに問い合わせるから。—

との返事がある。その言葉に、私はふと、不可解感と不快感を同時に覚える。

—何故だ。どうしてだ、・・・・・・・・？—

そんな時、私の頭にあることが浮かんで来る。

—そうか、国際捕鯨問題がある、・・・・・・・・。—

結局、私の出席は許された。その会議の期間中、ある情景に出会ってまた驚く。

会議場はPKの市街から北に六十キロ。だから、参加者やスタッフの移動に際して、車は欠かせない。ところがその主役の車に日本から送っておいいた二台のポンコツカーが活躍している。

運転席に座るサーシャ。ブルカノフの義兄に当たる小太りで色白の彼がこちらを見て右手を挙げ、片目を瞑って笑い掛ける。

九月半ば、すべての予定を終えてPKの空港に向かう。その時、私を送ってくれるのはカムチャツカ漁業規制局の衛星電話を備えた新型のワンボックス

か。規制局長の専用車であると同時に、ブルカノ専用の車でもある。
その車の中で私はふと考えていた。

―最初ロシアを訪れた昨年、自分は荒々しい海に浮かぶ小舟に過ぎなかった。
しかし二年目の今年、私は落ち着き、静かにロシアの社会とそこで暮らすロ
シア人の姿を眺めている。そして今、ロシアを去るに当たり、自分は逞しい
ロシアの研究者に心から共感し、尊敬の眼差しさえ送っているようだ。―